柔道歴史探訪

～講道館道場をあるく～

講道館が明治15（1882）年、下谷永昌寺のわずか12畳敷きの書院において創始されたことは周知のことであろう。しかし、その講道館道場が南神保町、上二番町、富士見町、真砂町、下富坂町、水道橋と幾度もその所在地を替えてその度に畳数を増やし、春日町に居を構える現在に至ったことはご存じだろうか。

本稿では、歴代の講道館道場について、資料や地図などを用いて紹介してゆく。また実際に道場跡を訪ねもし、講道館の面影を探してみたいとも思っている。

この稿が、かつての講道館やその雰囲気を知るよすがとなれば幸甚である。

本　橋　端奈子
（講道館柔道資料館　学芸員）

永昌寺道場

◆講道館草創

永昌寺は、永禄元（1558）年に下谷長者町[1]で創始され、後に現在の場所（台東区東上野５丁目）に移転した浄土宗の寺院である。その場所は、かつては下谷区北稲荷町と呼ばれる一帯であった。東西南北が練塀で囲まれた大きな山門をくぐると、2000坪あまりの敷地[2]に蓮池やおおきな菩提樹があり[3]、また立派な武家造の本堂があった。嘉納治五郎師範は明治15（1882）年２月、寺内の書院２間と附属室を借り、書生らと共に居を構え嘉納塾を開く。そして書院２間のうち１間12畳[4]を道場として、同年５月講道館を創始したのであった。

当時[5]入門者が順番に署名をした「講道館入門誓文帳 第一[6]」をひも解いてみると、富田常次郎の名が筆頭にある。講道館柔道の最初の入門者である富田常次郎[7]は、嘉納師範の父・嘉納治郎作希芝の書生で、少年時代より師範の子分のような立場だったという。明治15年に講道館を開くより前から、富田は師範の柔術研究の相手をしており、その縁もあって、師範が永昌寺に家を定めることになった際も自然一緒であった。富田の他、志田四郎[8]（後に西郷と改姓）、中島玉吉など数名の書生と、客分の白井小助[9]、煮炊きなどをするおせきという老齢の女性[10]、といった所帯であった。

書院は２間半の正方形で、四方に柱が建っており、周りは畳廊下となっていた[11]。ここと次の間７畳、そして附属室が嘉納師範と書生らの書斎兼寝室、客間、そして道場でもあった。稽古をする時は机や書物を片づけ、襖を外したりして使用していた。ただし、永昌寺で大きな法要がある場合は２間とも一時空けなければならなかったという[12]。師範は大学を出て学位を帯びた身ながら、１書生と同じように、皆と起居を共にしていた。食事も書生らと同じ食卓につき、時に講義を行いながらの食事になったこともあった。また、書院から外井戸まではかなり距離があり、雨の時などは師範が率先して水を汲みに行き、おせき婆さんを助け労わって暮らしていたという[13]。

◆稽古のようす

先に「書院の12畳を道場とした」と述べたが、もっとも、はじめのうちは敷地にあった雑木林で稽古をしていたらしい。当時の住職朝舜法氏は、柔道衣が汚れてしまうのを気の毒に思い、「中でやりなさい」と声をかけてやったのだという[14]。

まだ無名である講道館で柔道の稽古をする者は、富田や西郷など住み込み書生の他は、師範が教鞭をとっていた学習院の生徒など数人だけであった。樋口誠康子爵や有馬純文子爵などである[15]。また、師範が起倒流を学んだ飯久保恒年師が週に２度ほど教えに通っていた。他には、正式な入門はして



永昌寺（大正７年頃）

いないが、師範の兄である嘉納謙作、師範同窓の坪井九馬三、石川千代松、箕作元八などが通っていたという。当時は「柔術」など嘲笑する者こそあれ、かえりみる者は皆無であった。嘉納師範は、門人を増やすために様々な工夫をしている。入門料・月謝などが無料なのは勿論のこと、稽古に来る者に喜んでもらうため、麦湯に砂糖を入れてふるまったり、境内の蓮池から採った若葉で蓮飯を作ってご馳走したりなど、師範自ら弟子を歓待したのであった[16]。また柔道衣も貸し出し用に何着も用意してあり、通う者のことを考え常に清潔に洗濯してあった。この洗濯と補修は富田や西郷の仕事であり、富田は後に「１番嫌な仕事であった」と述懐している。稽古も、いつ誰が来ても良いように時間は定めず、師範自ら柔道衣に着替え、人が来るまでは机に向かい勉強して待った。そして人が来れば昼でも夜でも、時には夜中12時近くまで稽古をしたという。また門人を飽きさせないため、日曜日には門人らを向島の隅田川へ船遊びに連れていったり、白山にあった師範の父親の別荘・紅緑山荘に招待したりして持て成した[17]。これらの運営費用は総て嘉納師範の自弁であった。学習院の給料だけでは到底まかない切れるものではない。富田は当時の金の苦労と工面を次のように語っている。



講道館創始の頃の嘉納師範
（中央、東京大学卒業記念写真）

> 英書の翻訳こそ、実に先生唯一の内職であった。先生はその頃、金の必要が生ずると、いつも急に夜遅くまで、時には徹夜までして、一生懸命にこの翻訳を始められた。そうしてその原稿料なるものが、当時一枚一円であった。それが何十枚か脱稿すると、筆者はそれを携えて、かねて約束の文部省の会計課長（永井久一郎氏？）の処へ持って行き、同氏から小切手を貰って、更に日本銀行に廻り、現金を受取って来たことが度々あった。その英書というのは、たしかシッヂウック[18]の倫理学書であったと記憶している。だから当時先生の唯一の道楽であった「武」すなわち柔道から生ずる赤字額を、「文」すなわち翻訳をもって填補したという訳であったから、洵に神聖なる内職であった。[19]

師範は、英書を翻訳することで、その費用を工面していたのであった。時に徹夜で翻訳をし、また書生らも出来上がった原稿を片端から清書をして徹夜で手伝ったという[20]。

門人は少ないながらもこうして始まった講道館柔道だが、書院の12畳で稽古を続けるうち様々な問題が起こってきた。昼夜間断なく行われる猛烈な稽古のおかげで床が緩んで根太[21]が抜け、畳を打ちつける音が響き渡るようになり、住職から苦情が入ったのである。苦情を受け、師範は夜中に富田と西郷を床下に潜らせ、自らは畳をあげてロウソクで床下を照らし、ひそかに床の修繕を再三行ったりもした。しかし、今度はまた住職から「稽古の度に位牌が躍ってひっくり返って困る、瓦もずれている」との申し出があり、草創から３ヶ月もすると書院での稽古は中止せざるを得なくなったのであった[22]。

◆新道場の建設

そこで師範は、境内の空き地を借り入れ、新たな道場を建てることとした。勿論自分たちの手弁当で全ての作業をこなすのである。富田、西郷、森丈太郎[23]などが汗を流し、15年秋のはじめ頃、新道場は完成した。ころばし根太[24]でこけら葺、板囲いのバラックのような簡単で粗末なものであったが、横２間縦３間の12畳で、西側に小さい武者窓も付き道場風の格好はついていたようである[25]。北側は庫裏に直付けで、東側の壁には柔道衣がいつもかかっていたという[26]。

ここに、明治42（1909）年のころの永昌寺見取り図に樋口誠康がかつての記憶を頼りに道場を書き入れた地図がある（図[27]）。樋口は、入門誓文帳に富田に次いで２番目に署名をした最古参であった。本堂の横に道場としていた書院、そして本堂に続いて位牌堂があるが、この位牌堂の位牌が躍り倒れ住職の不興を買ったということだから、振動が２棟先に伝わるほどの相当に激しい稽古をし

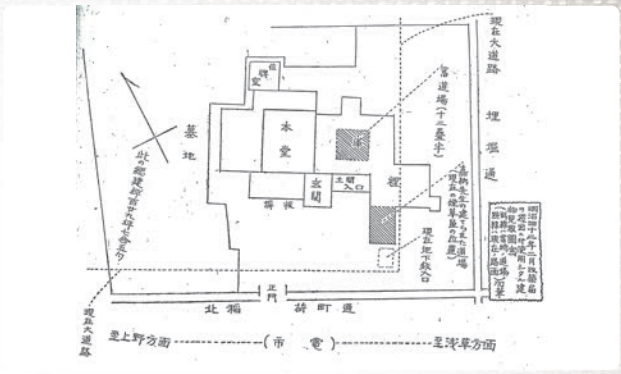
ていたであろうと想像される。

この新道場は明治16（1883）年２月、師範が講道館道場を神田区南神保町[28]に移すに際して、永昌寺に寄贈したという[29]。

◆130余年を経て

永昌寺は関東大震災での焼失、区画整理などでの敷地縮小を経て、雑木林や蓮池は無くなったものの、現在も同地に建っている。建物は昭和40年代に建て替えられたものであるが、山門は昭和７（1932）年の再建で、古い門（写真）と見比べても当時の面影をよく残しているといえよう。山門脇には甲州産真黒石の「講道館柔道発祥之地」碑があり、この地で呱々の声をあげた講道館を偲ぶことができる[30]。また、寺入口には、台東区が設置した柔道発祥の地プレートもある。

嘉納師範は当時を追想して「書生を養うのと、道場の経費は容易なことではなかった。それを病気もせず、元気一杯でやり遂げたのも柔道の賜（たま）ものである」と述懐している[31]。武術自体が掃溜めに打ち捨てられたような扱いであった時代、講道館柔道は文学士がはじめた「戯れ」と、世間から相手にもされなかった[32]。富田ら直弟子たちは、師範の素晴らしい講道館柔道の真価を世に知らしめるべし、と命懸けの修行をした。それは討ち入り前の赤穂義士の気概のような、そんな悲壮なものであったという[33]。今日、柔道が世界各国で盛んに行われている現状を見るにつけ、そして当時の彼らの心情を慮るにつけ、まさに今昔の感に堪えない。講道館柔道の歴史は、永昌寺のわずか12畳の道場から始まったのであった。



明治42年頃の永昌寺見取り図

永昌寺道場

所在地：下谷区北稲荷町16-1 永昌寺内
現住所：台東区東上野5-1-2
道場の広さ：12畳（12畳半とも）
期間：明治15年２月～明治16年２月
明治16年２月までの累計入門者：９人


現在の永昌寺

南神保町道場

◆弘文館の開校と師範の引っ越し

嘉納師範は、嘉納塾・講道館を興すとともに、弘文館という学校をも設立している。明治15（1882）年９月頃のことである[34]。自ら学得した学問を少しでも世の中に広めたい、という志から興したものだという。初めに英書を読解できるようにし、その後政治学・理財学・法理学などを原書で教える、３年制[35]の学校であった。はじめは麹町区富士見町[36]で開校し、その後南神保町[37]に移転している。師範は、弘文館を創始したことについて、後に次のように述懐している。

> 講道館を創立したことは、今から考えても、誤ったとは思わないのであるが、弘文館を興したことは、不得策であったとおもっている。そのわけは、当時物価の至って低廉であった



明治期の南神保町付近地図。
中央に「南神保町」、左上の「今川小路二丁目」に
「専修学校」が見える

時代といいながら、一つの学校を興すというには相当の資金を要する。また学校の経営上・教育上、かなりの時を要する。そこで、一方には翻訳などして金をつくり、非常なる勉強によって、自分の修行もし、学習院の職務をも尽くし、また講道館も弘文館も経営するのであるから、ひととおりの努力ではなかった。一方からいうと、こういうことをしたために、世の実務にあたり、人をあつかう道を覚え、奮闘努力の習慣を養成したという利益はあったかも知らぬが、当時未熟なる自分としては、それだけの力をば、他日大いに世に尽くすために、自己の修養に用いたならば、より一層有効であったことは、いうまでもない。しかしながら、これも畢竟、自分の天性のしからむるところで、人を教えることを楽しみとし、己の力をもって世にほどこすをよいことと考えたためであった。[38]

師範のもつ、教えることを楽しむ天分を原動力として、弘文館は運営された。学習院の職に支障の出ない時間割を作り、昼夜を問わず師範自ら教鞭をとったという[39]。この弘文館は明治22（1889）年、師範が洋行するにあたって閉校となったが、郷誠之助男爵、伊丹二郎[40]、本田増次郎[41]や宗像逸郎[42]など各界で活躍する人物を輩出している。

また、弘文館と並行して、永昌寺の講道館において柔道普及に努めていた師範は、明治16(1883)年２月、今川小路[43]に自宅を移すことになった。これは、師範の友人である村田源三氏の依頼で、今川小路にある田中芳男博士の家を一緒に借りることになったためである。村田は山口県の生まれで、師範とは学生時代から友人であった。明治12年（1879）頃、当時神田三崎町[44]の明道学舎に寄宿していた師範は、近所の友人らと「遠足会」を設立したことがあった。その際に富士見町有則学舎にいた村田源三も会員として名を連ねている[45]。また野球仲間でもあり、山下義韶[46]らと共に長い付き合いの友人であったようである。そして明治16年になって、村田が経営する日本興産社の事務所用に家を借りるため、学友である嘉納師範に一緒に家を持ってほしいと話がきたということらしい。この頼みを快諾した師範であったが、今川小路の自宅と永昌寺では距離があり不便なため、講道館も永昌寺から引き揚げて他へ移すことになったのであった。

南神保町の土蔵道場

引っ越した今川小路の家はかなり広く、富田や西郷らの書生を置くのには良かったが、道場として使える部屋は無かった。そこで、当時南神保町に移転してきていた弘文館に附属の土蔵があり、そこを道場に充てることとなった。弘文館はもともと旗本屋敷だった建物である。しかしいかんせん土蔵なので、狭い上に陽もささないため暗く寒く、床も固すぎて道場としての使い勝手は頗る悪かった[47]。さらに梯子段は出っ張っている、角のある柱も立っているという柔道にはおよそ適さない場所であった。永昌寺から運んできた畳を敷いてみたものの、やっと10畳敷ける位の広さだったという。その狭い中で稽古に通う者たちは元気よく巴投や捨身技をかけ暴れ回るので、師範は彼らを怪我させないように細心の注意を払って指導した。


代稽古を行っていた
当時の西郷四郎

この南神保町の土蔵の道場に入門した者は、南摩綱夫、河瀬兵治、岩波静彌の３名のみとなっている[48]。しかし、入門誓文帳に名前は書かな

かったものの、当時稽古に通っていた者には師範学友の鈴木馬左也[49]、稲垣満次郎[50]、亀井英三郎[51]などがいる。永昌寺時代から通っている石川千代松[52]氏の回想によると、南神保町の暗い土蔵に行くと、まだ入門者も少なかったので、嘉納師範は喜んで迎え入れてくれたという。そのうちに柔道の面白さに興味が湧いてきて、本郷壱岐坂下[53]に石川と友人らで独自に道場を建てて、皆で稽古を積んだ。この道場にも折々嘉納師範は稽古をつけに来てくれていたということである[54]。もちろんまだ入門料も稽古料もとらず無料で教えていた頃である。師範は当時、弟子を得るのにいかに苦しんだか、ということを後に何度も語っている。柔道の師範として自分は自信を持っていても、周りは若輩の文学士としてしか見てはくれない。せめて立派な道場があれば少しは違ったかもしれないが、現状土蔵の中で稽古をしている有様である。さらに、書生を養う費用や道場費、また弘文館経費などのため、学習院の給料だけでは足りず、先述したように[55]翻訳の内職もして費用を捻出しなければならないので時間も足りない。当時の師範の生活は、朝６時から午後２時まで弘文館で講義、その後学習院で授業を受け持ち、夕方からは道場に行き柔道の指導・研究、夜は講義の準備や翻訳をして深夜０時を過ぎることも度々であった[56]。師範の懐古を次に示そう。

> 一つ苦心したことは、当時のことであるから、稽古時間を限定すると通ってくる人に都合が悪いので来てくれない。それ故、日曜は午前七時から正午まで、いつ来ても良いことにし、ふだんは午後の三時から七時頃まで、いつでもよいということにした。稽古するものの少ない割に時間は大変長い。しかるに、その時間に自分が道場に出ていなければ、来るものが相手がいないといって帰ってしまう。そうしてその次からは来なくなる。これを長くつなぐにはいつ来ても稽古の出来るようにまちうけてやらねばならない。午後のときは格別苦痛でもなかったが、日曜日の、寒気のきびしい午前七時からのときなどは、人の来ると否とにかかわらず、じっとまっていることの苦痛はたいていなことではなかった。自分が何か他に用事ができるか、またはその他の差支えで、日曜日の七時から出ておられないときは、西郷四郎をさきに出しておいて、自分があとから出る。すると、西郷は凍りつくような道場で、身に迫る寒さと戦いながら、唯一人ポツネンとして来場者をまっている。その状が今もなお眼底に明らかである。最初から自分の出るときは、西郷と二人でまず稽古をするのであるが、その時は、足は冷えきって棒のようで感覚がない。（略）その当時はいうべからざる苦心はあったが、これが今日の講道館を作りあげたのだと思えば、むしろその記憶が愉快にたえない。[57]



復元された専修学校の黒門

暗い道場で寒さに堪える、西郷四郎の様子が眼前に浮かぶようであろう。稽古は平日午後３時から７時まで、日曜は朝７時から正午まで、連日休みなしで行っていたことがわかる。この師範の懐古にもあるように、西郷や、また富田常次郎がこの頃師範の代稽古を務めるようになっている。そして16年８月には、富田と西郷に講道館初めての段位が与えられ、共に初段を許されることとなった。

講道館道場は16年９月、多くの苦心譚を遺して上二番町[58]へと引き移ることとなる。しかしその豊富なエピソードに比して、南神保町の土蔵での期間はわずか７ヶ月間、正式な入門者も３名のみ、というものであった。

◆南神保町と今川小路の現在

道場と弘文館のあった南神保町は、表神保小路と裏神保小路に挟まれた地域である[59]。昭和20（1945）年の空襲を免れた地域なので、かつての地区割が大凡そのまま残っており、靖国通りに面した現在の千代田区神田神保町２丁目界隈である

ことがわかる。今は岩波ホールと、神田古書センターをはじめとした古書店が立ち並ぶ一角となっている。また、靖国通りを西に１区画歩き、「専大前」の交差点を右に曲がると、専修大学が見えてくる。この地が往年の「今川小路」、師範が家を構えた場所であった。現在は大きいビル校舎となっているが、その片隅に専修大学の前身である専修学校の黒門[60]が再建され、明治当時の雰囲気を感じ取ることができる。

筆者は南神保町道場から今川小路までを実際に歩いてみたが、徒歩およそ３分の近さであった。しかし、師範は自宅と道場が離れていたため深夜に技を思いついた時などにすぐ試せず困ったと述べており、徒歩数分の距離でも不便に感じるほど柔道研究に没頭していたことがよく解る。柔道の入門者は依然増えないままであったが、柔理を追求し大成させるために必要な、講道館柔道の伏竜鳳雛時代であったといえるであろう。

南神保町道場

所在地：神田区南神保町 弘文館の土蔵内
現住所：千代田区神田神保町２丁目
　　都営三田線新宿線神保町駅より徒歩１分
〔師範自宅・嘉納塾〕
　所在地：神田区今川小路
　現住所：千代田区神田神保町３丁目
道場の広さ：10畳
期間：明治16年２月～９月
この期間の正式入門者：３人
明治16年９月までの累計入門者：12人



この頃の門人
前列左　西郷四郎、その隣　山下義韶、
後列左は富田常次郎

上二番町道場

◆自宅、嘉納塾と道場を集約

明治16（1883）年９月、嘉納師範は麹町区上二番町[61]にあった神代名臣の家を借りている。神代は大社教の神官をしており、江戸期そのままの旗本屋敷に暮らしていた。立派な冠木門を持ち、部屋数は７、８つあって他に台所、風呂、手洗所もあった。また広い庭には出雲大社の社があって老樹が数本繁っており、長屋が２軒程建っていたという[62]。師範はここに講道館・嘉納塾・師範邸を集めて移すこととなった。師範がなぜ今川小路から上二番町へ引っ越しをしたか、具体的な資料は見つかっていない。だが、一緒に今川小路の家を借りていた友人の村田源三が、これより後仕事の関係で福島へ転居しているので、恐らく村田氏の事情で今川小路の家を出ることになったのではないだろうか。

この家は、先述したように部屋数も多かったので書生を置くには困らなかったが、道場に充てる部屋が無かった。そこで玄関脇にあった８畳を道場として稽古を始めることとなった。しかし、修行者は少なかったものの、やはり８畳では狭すぎたようである。すぐに８畳にあった押入れを潰して２畳増やし、10畳敷きの道場とした。その際、柱を１本切らなければならず、家主の神代氏は難色を示したが、師範は交渉を重ね、遂に承諾を得て増設が叶ったという。強引ではなく誠実に合意を見たであろうことは、16年11月に神代氏の長男 神代敷が講道館に入門しており[63]、その後も良好な関係が続いた様子から推測できる[64]。

こうして自宅・嘉納塾・道場が１ヵ所に集約されたことで、南神保町時代より種々の面で便利になり、師範は毎日午後２時から深夜11時12時ころまで稽古を行うようになった。門人も少しずつ増えてきており、10畳の道場でも手狭になってきたため、16年末[65]には、庭を借りて新たに20畳の道



上二番町時代の講道館門人
２列目左から４人目より横山作次郎、西郷四郎、本田増次郎、嘉納師範、岩波静彌、宗像逸郎、
湯浅竹次郎、師範のうしろ富田常次郎

場を新設している。床はころばし根太で奥に障子窓を設け、左右は150㎝くらいまで腰板を貼り、上に武者窓を設けた永昌寺道場と似た造りであった。やはりバラックのような簡素さではあるが、畳は麻糸で刺した特注のもので、今までにない広さの道場に皆大喜びしたという[66]。またこの20畳の道場において、初めて師範席が設けられたことも着目すべき事柄であろう。嘉納師範は20畳を３段に分け、上段を師範席、中段を陪観席とした[67]。見学者を呼び込み、柔道の普及宣伝を図ろうという師範の考えが見て取れる。当時では当たり前の感覚であろうが、陪観席は正座での見学のみで、段に腰掛けることは許されていなかった。この席に後述する初の外国人修行者イーストレーキが腰掛けたことで、門人皆で憤慨したという記録が残っているほど、そういった儀礼は厳格であった。

◆制度・行事の制定

新しい道場ができたことが契機となったのか、明治16年末から17年には講道館の基礎となる様々な行事や制度が定まっている。鏡開式、月次試合、紅白試合、寒稽古、昇段式、数稽古などである。投の形、固の形が制定されたのもこの頃であった[68]。講道館員は強さの順に席次が決められ、毎月第２日曜の月次試合ではその順に３本勝負の勝ち抜き試合が行われた。そして、勝てばその分だけ席次があがっていく仕組みとした。紅白試合は、講道館幹事を任命されていた富田常次郎と西郷四郎が紅軍白軍それぞれの大将となり、年２回挙行されている[69]。しかしこの頃は、人数が少ないため全ての試合が午前中に終わってしまうほど小規模なものであった。また現在と違い、講道館員は月謝がいらない代わりに、正月には鏡餅[70]を持参し嘉納師範に年始の挨拶をする決まりがあった[71]。幹事が持参した者の名を一々大福帳に書きとめていたのも時代を感じ、興味深い。この鏡餅は正月第２日曜の鏡開式で開き、お汁粉や揚げ餅にして皆で食べることになっていた。寒稽古は、江戸期には武芸の稽古法として行われていたが明治に入り廃れていたものを、嘉納師範が復興させ根付かせた行事である。「困苦に克つ精神を養い、艱難（かんなん）に耐えうる身体を養おう[72]」という考えのもと、寒中の30日間、朝４時から７時まで行っていた。また初めて「講道館」という看板を掲げたのもこの時期であった。

この当時の入門者は帝国海軍軍人 湯浅竹次郎（いつろう）、英文学者の本田増次郎、講道館元老の宗像逸郎、初の十段 山下義韶（よしつぐ）、南摩落し（背負落）で有名な南摩紀麿（なんまのりまろ）、松岡辰三郎、小田勝太郎[73]、佐藤（岩崎）法賢、關順一郎と、講道館草創期を支えた錚々たる顔ぶれが続く。また嘉納塾生として、師範の甥で第２代館長である南郷次郎もこの頃入門している。まだ８歳であった。師範は講道館柔道

の宣伝のため、南郷を連れて色々な場所へ出向き、小さな子供でも出来ることを盛んにアピールしたという[74]。また、永昌寺時代より師範に付き従っている杉山せき[75]、また湯浅竹次郎の母も住み込みで書生らの世話をしていた。

他にこの時期について特筆すべきことは、初めて外国人の修行者ができたことであろう。イーストレーキというアメリカ人の兄弟２人で、兄は100kg近くの肥大漢であった。彼は始め、自分に比べて矮躯の講道館員らを、そしてそんな彼らがやる柔道という格闘技を侮って、稽古に来たようである。そこで師範は館員中最も小柄であった西郷と組ませた。小さい西郷に何度も投げつけられ翻弄されたイーストレーキは考えを改めて柔道を称賛し、またこの出来事は、講道館が世間の耳目を集めるきっかけとなった[76]。講道館の名は徐々に知られるようになり、明治17（1884）年末までに入門者は30人、18（1885）年末までには総計81人と、急速に増加していったのであった。そして、この頃行われた[77]警視庁主催の武術大会において、講道館は他の柔術流派を圧倒して勝利した、と今に伝えられている。この勝利により、「講道館」の名とその強さは、さらに広く世間に知れ渡って行ったという。

入門者が増え始めたことで入門録の必要性が生じ、明治17年初頭に入門誓文帳が設けられた。この時、講道館草創からの入門者らは日を溯って署名をしており、この「講道館入門誓文帳 第一」は今も講道館に保存されている[78]。入門者が増えたと言っても、師範は館員らと散歩をしたり、当時まだ珍しかった洋食を食べに皆を連れていったり[79]と、打ち解けた家族的な雰囲気はそのままであったという。

◆麹町分場と第２期上二番町時代

明治19（1886）年２月、講道館は九段にあった品川弥次郎子爵邸[80]に移転することとなった。上二番町道場は品川邸まで曳かれて行き、40畳に増築して再び道場として利用されている[81]。その後明治22（1889）年、道場が本郷区真砂町（まさごちょう）[82]に移るに当たって、富士見町にあった道場は再び上二番町へ移築され、師範はここを「講道館麹町（こうじまち）分場」と定めて増加する修行者の利便を図った。麹町分場と嘉納塾の監督には本田増次郎[83]が任命されている。



丸に一文字の五つ紋で市中を闊歩した番町連。
２列目左は永岡秀一

同年９月、嘉納師範は教育事情視察のためヨーロッパへ１年半程派遣されることになり、留守中の事務を幹部の西郷四郎、本田増次郎、岩波静彌に任せることとなった。必要な資金は全て本田に渡し、兄である嘉納謙作氏にも頼み[84]、門弟1300名を残して師範はヨーロッパへ旅立っていった。この間のことは次項以降詳述するが、師範のいない間、西郷を始めとする講道館員は金銭関係など様々なトラブルを起こしたようである[85]。明治24（1991）年１月、横浜埠頭に降り立った嘉納師範は、荒廃した講道館の様子と西郷の逐電を知らされた。その時の師範の落胆と絶望のさまは、言葉に表せないほどであったという[86]。そしてすぐに、追い打ちをかけるように真砂町道場の明け渡しが決まる[87]。行き場を失った講道館は、麹町分場として運営していたかつての上二番町へ統合されたのであった。上二番町道場を本館とした時代は明治26（1893）年12月まで続いた。これを第２期上二番町時代とする。富田常次郎の言葉を借りれば、講道館が経営上存続の危機にさらされた「闇黒（あんこく）時代[88]」であった。

約70畳あった真砂町道場から運んだ畳は上二番町道場の隅に積み上げられ、修行者は40畳の道場で窮屈な稽古を強いられていた。さらに、嘉納師範は同年９月、熊本の第五高等学校校長として赴任が決まり、不安定な講道館を離れなければならない状況となっていた。

しかし、講道館経営の苦境とは裏腹に入門者の数は増え続け、明治24年には1800名、26年末には



現在の上二番町道場跡付近

2700名に達している。入門者も後の十段である磯貝一[89]、永岡秀一、飯塚國三郎[90]など、講道館を支える柱となった人物が多く並んでいる。柔道の講道館という名前はすでに東京市中に轟(とどろ)いており、館員らは様々な武勇伝、英雄譚そして失敗談で新聞などを賑わせた。特に、〇に一文字（㊀）の講道館印(しるし)の五つ紋[91]で揃えた紋付を着て短い袴を履き、足は下駄といったスタイルで街中を闊歩していた彼らは上二番町の地名に由来して「番町連(ばんちょうれん)」と呼ばれ、恐れられつつも１種の流行スタイルとなったという。当時廃れていた紋付が一般の書生らにまで流行し、少年らは「講道館の西郷だ」と名乗りをあげてチャンバラごっこに夢中になっていたそうだ[92]。講道館が１つの世間の潮流を造っていたというのが面白くもある。この時期、嘉納師範は東京を離れていたものの、最古参である富田が講道館幹事を務め、師範洋行中のような失敗は繰り返すまいと血気盛んな館員をしっかりと束ねていた。

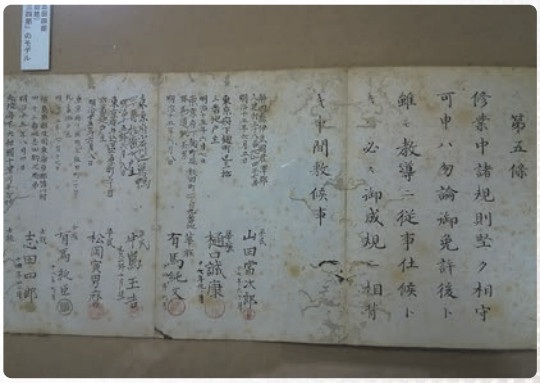
◆上二番町の今

明治16年より26年末まで、名称を替えつつ足かけ10年に亘り講道館道場があった麹町区上二番町は、現在では東京都千代田区一番町と呼ばれている。江戸期は旗本の家が建ち並んでいたが、明治期に入ると殆どが爵家や実業家らの大きな屋敷となった。上二番町道場の付近には鷹司熙通公爵邸、加藤弘之男爵邸、堤正誼男爵邸、三井財閥を率いた三井高保邸などがあった。道場のあった一角は区画が変わっておらず、淡路坂と五味坂に挟まれた場所と判別されるが、上二番町道場地は現在マンションとなっている。現在の淡路坂は「番町文人通り」という名称に変わり、道場跡のマンション敷地前には「哲学者 串田孫一旧居跡」のプレートが建っていた[93]。また屋敷があった頃から受け継がれたと思われる古い石灯籠が庭に据えられていた。道場跡向かい、旧・堤正誼男爵邸は敷地の塀や老樹がそのままローマ法王庁 大使館となっており、明治期の番町の雰囲気[94]が少々残っていると言えようか。

嘉納師範は、明治26年時点で2600名の講道館門人を抱えながらも、道場費は徴収せず、ほぼ自弁で講道館を運営していた。第１期上二番町時代、麹町分場時代、そして闇黒期と呼ばれた第２期上二番町時代を経て、明治26年12月、講道館は下富坂道場へ移転する。こうして、10年に及んだ上二番町道場はその役目を終えたのであった。

上二番町道場

所在地：麹町区上二番町45（後に42）
現住所：千代田区一番町40付近
　　地下鉄有楽町線麹町駅・半蔵門線半蔵門駅より徒歩５分
道場の広さ：８畳→10畳→20畳→40畳
期間（累計入門者）
　上二番町時代：明治16年９月～19年２月（92人）
　麹町分場時代：明治22年４月～明治24年春（約1860人）
　第２期上二番町時代：明治24年春～明治26年12月（約2750人）



最初の入門誓文帳

富士見町道場

◆品川子爵との縁で道場移転

以前の本連載で先述した[95]師範の友人 村田源三が、山口県出身者として同郷の品川子爵に恩顧を受けており、その関係で嘉納師範と品川弥二郎子爵は明治18（1885）年ころより親交を結んでいる。品川はよほど師範の人品を気に入ったのであろう。ドイツ公使として日本を離れるにあたって、師範に、品川の家屋敷を貸したいという破格の提案を出してきた。師範の回想を次に掲げる。

> 当時子爵の住んでおられた家は、富士見町一番地で、今の添田寿一[96]の家も込めて一千坪程の地面に、百坪以上の西洋館と日本館とが建っていたのだが、そこには品物がたくさんある。それをそのまま貸家にするも好まない。さればとて、留守居を置くに適当の者を考え出さないから、ここへ自分に住んでくれぬかという話だった。自分は当時、書生とともに独身生活で、雇婆に炊事をさせていたので、ようやく七間ほどの家にいたのだから、子爵の邸宅は身分不相応でもあるし、かつ書生が住み荒らす心配があるからといって断ったが、それは一向かまわぬ、家賃もいらぬが、それではかえって住みにくかろうから、これまでの家の家賃と同額にしてはいるようにと、特にすすめられたので、遂に承諾して、明治十九年の春に書生をつれて移転し、上二番町の道場はそこの空地に移築することにした。[97]

いまだ若年である嘉納師範の事業を手助けしたいという気持ちもあったのであろう。師範は有り難くこの提案を請け、上二番町にあった20畳の道場を約１㎞離れた麹町区富士見町[98]まで曳いていき、ここを講道館富士見町道場とした。明治19（1886）年２月のことであった。嘉納塾塾生も主な者は品川邸に同居し、その数は多い時で数十人に昇っている。講道館四天王の１人横山作次郎[99]の正式入門もこの頃で、当時の講道館全体の入門者は約100人を数えていた。

品川子爵の屋敷は立派な邸宅で、門から玄関までは20間[100]以上も離れていたという[101]。1000坪の敷地に立派な西洋館と日本家屋が建っており、師範らは庭に曳いて来た20畳の道場を40畳に建て増しをし、柔道の研究に精力的に取り組んだ。門を入り左に西洋館、右に道場があったという。隣の邸宅には西郷従道候[102]が住んでいたが、変わったものが好きで邸内でイノシシを飼っていて、ある時そのイノシシが逃げ出したことがあった。西郷は「隣の講道館へ追い込め、柔道で捕まえてもらえ」と言い、講道館内にイノシシを追いやってしまったという[103]。それ位、講道館は強い、という認識が一般的に広まっていたことが窺える。

ここに、富士見町時代の門人らの掃除担当表がある。興味深い資料であるので、ここに掲げよう。

西洋館

二階客室及ビ之に付属ノ階段　山田常次郎
同　私室及ビ之ニ付属ノ階段　保科四郎
下　広室　大倉増次郎
同　小室　湯浅竹次郎
… 一週間に二回ヅヽ
自室及ビ之ニ付属ノ板間階段　保科四郎
自室及ビ其前ノ廊下　峰小六・嘉納徳三郎
自室及ビ其前ノ廊下　山田常次郎・田村克和・高原鉄太郎
自室及ビ西洋館ニ沿エル敷物アル廊下　湯浅竹次郎
自室及ビ其前ノ扱廊下及ビ西洋館前ヨリ玄関ノ側ニ至ルマデノ敷物アル廊下　岩嵜秀太郎・森山叅之助
自室及ビ其隣室ナル客室及ビ之ニ付属セル廊下　大倉増次郎・峰新太郎・日高驥三郎・志立悌之介
自室及ビ玄関内玄関　山下義韶・小田勝太郎
道場一般　横山作三[104]
以上[105]

西洋館の部屋数は、この担当表によれば少なくとも11以上はあり、沢山の廊下や、玄関内玄関まであったことが分かる。また、どの門人が同室で起居していたのかも分かり面白い。山下義韶と小田勝太郎は玄関すぐ脇の部屋で、２人で玄関番を担当していた。門人らは冬でも素足で羽織も着ず、質実剛健の暮らしを徹底していた。師範が外出の際、そして帰宅の際には大太鼓を叩き、門人一同が玄関に居並んで送迎をしていたそうである[106]。また、「道場一般　横山作三」これは横山作次郎

のことであるが、横山だけは家に部屋を持たず、道場番として道場で暮らしていた[107]。道場には棚などが何も無いため、毎晩布団をかついで道場へ行き、朝になると下駄と草履を片方ずつ履いたような格好で布団をかついで西洋館の方へ運んでいたという。横山は、毎日庭で20kg近くの鉄棒を振り回したり、門人を戯れに釣り上げたりするほどの筋力の持ち主でありながら、稽古ではその力を巧みに抜いて無理な柔道はしなかった。それが彼を名人たらしめた、と富田常次郎らは述懐している。

◆富士見町時代の稽古模様

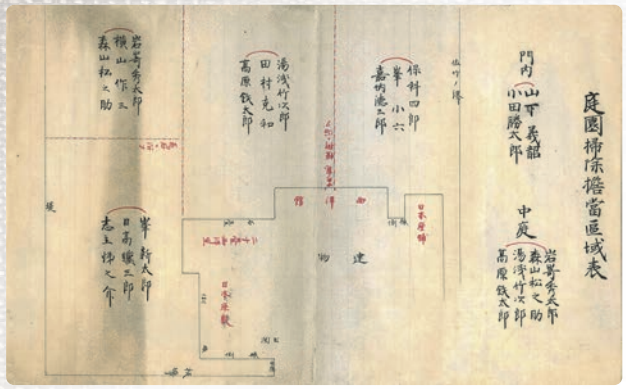
横山の例を見ても解るように、当時の講道館の稽古は、柔の理を追求し作りに重きを置いて、なるべく柔らかに身をこなすことを主とし、体力より技術の発達に力を注いだ時代であったという[108]。そして嘉納師範はすでに柔道を勝負法・体育法・修身法と３分割して攻究する方法を確立していた。その当時の講義の様子は、講道館理事 嘉納徳三郎の言に詳しい。

> 勝負法の柔道では、従来の柔術教師の用いた以心伝心的教授法を改めて、厳密なる力学の法則の上に立って、科学的に、微に入り細を穿って、重力の説明から中心の移動を説明せられ、極力、力学の法則に反する強引な技を戒められたので、自然門人達も自分の工夫力を刺戟され、無理な技を出来る限り避けて、自然に冴えた技を研究するようになった。も勿論当時は、固技も相当研究されてはいたが、どちらかと言えば立技の方がむしろ主として研究されていた。
>
> 一例を具体的にあげて見ると、当時の勝負法の練習として、第一に心掛けた事は、立技に就いては、先ず「つくり」に重きを置くと云う点であった。即ち技をかけるには、相手の体が技をかけ易い状態になった時――それは、自分が積極的そう云うふうに導いた場合、又は相手が消極的に自然にそうなった場合とを問わず―にかけるべきで、作りなくして強引に掛けに行くべからずと云う点に注意した。従って技が鮮やかに冴え、動作は何時も敏活であった。こう云う点を力学的に細かく研究したことは、柔道の技術を進歩させるのに非常に役立ったものと思われる。
>
> 体育法としての柔道としては、危険な技をなるべく避け、身体各部の円満なる発達をはかるため、各種の技を錬磨すること、技に無理をせぬことなどを特に奨励された。当時は未だ精力善用国民体育は出来ていなかったが、当時から先生が絶えず体育としての柔道と云う事に注意して居られたことが、つまりは後年の精力善用国民体育を生み出された基礎になったものであると言える訳である。
>
> 最後に修身法としての柔道に関しては、先生も特に力を入れて説かれた。殊に深切、礼譲る、注意、其の他の道徳上の教と、柔道との関係を説かれ、懇篤なる指導をされ、其の他精神の修養は勿論、処世万般の事に応用しなければならぬ所以を力説された。これは今日の精力善用・自他共栄と云う事と同じ意味で、説き方こそ大分違ってはいたが、其の根本の精神に至っては全然同じであった事と信ずる。[109]

嘉納師範は、学習院などで教鞭をとっていたが、帰宅すると毎日３時間は必ず道場で稽古をし、また日曜には必ず体育・勝負・修身法についての講



富士見町道場稽古の様子



庭園掃除担当区域表

義をも行っていた。講義の際には、30㎝ほどの関節が動く人形を用いて熱心に説明をしたという。柔の形（当時は体操柔の形と言った）や五の形が確立されたのもこの頃で、講道館において研究心が高まっていた時代であったと言えよう。

また、次に掲げる「講道館概則」が定まったのもこの頃であった。

講道館柔道（嘉納柔道トモ云ウ）ハ、維新前ニ柔術・体術・捕手等ノ名称ヲ以テ、世ニ行ハレタル武術ヲ基本トシテ、之ヲ学理一照シ考究敷衍シテ

（一）　身体四肢ノ作用ヲ自在ニシ且ツ之ヲ発育セシムル点

（二）　智ヲ研キ徳ヲ進ムル点

（三）　勝負ノ法ヲ練習スル点

ノ三事ヲ兼修スルヲ得シムルノ学科ナリ。

而シテ、此学科ヲ学ビ、其大体ニ通ズルニハ五ケ年の専修ヲ要ス。但シ、日本人普通ノ体格ヲ有シ、且ツ尋常中学卒業ノ程度ニ相当スル年齢ト学力ヲ有スル者ト仮定ス。故ニ其人ノ体格・年齢・智力等ノ如何ニ因リ、実際ノ進歩ハ必ズシモ五ケ年ヲ以テ其完全ヲ期スベカラズ。

修行中ノ階級ヲ十段ニ区別シ、初段ヨリ逐次十段ニ昇ラシム。而シテ前条ノ五ケ年ヲ十分シ、一ケ年毎ニ一段ヲ進ムヲ以テ制規トシ、十段ニ達シタル者ハ柔道全部ノ教導ニ従事スルコトヲ免許ス（略）[110]

これを見ても、やはり体育・勝負・修身の３つを学ぶことが明記されているのが分かるであろう。ただ、この概則通り、１年に一段ずつ昇段する者は稀であったという。

◆他流派と講道館

講道館が門人を増やし、名声が知れ渡るに従って、柔術各流派から試合を申し込まれることが増えて来た。これに対し嘉納師範は、日本全国からでも試合を引き受けて、いつでも応じる気構えをもって臨んだという[111]。明治19年、天神真楊流 八谷氏の道場開きに富田常次郎らが招かれた際にも、良移心当流（りょういしんとうりゅう）中村半助氏に試合を申し込まれたことがあった[112]。中村氏は、当時警視庁の柔術師範の中でも、最も剛の者として恐れられていた存在であった。富田は驚いたものの、この申し出を受け３本勝負を行った。そして中村氏を２本巴投で屠り、富田の勝利で終ったという[113]。この嘉納の門人が警視庁の名物男を投げた、という評判は、余程大きな話題であったのだろう、電話もない時代にも拘わらず、東京市内の各道場にその日の夜半には既に伝わっていたらしい。富田はこのことを天神真楊流 井上敬太郎氏から聞き及び、大いに面目を施したという。

こういった試合はこの時期に何度も行われており、その１つ１つが講道館の名声を高めて行ったと考えられる。またこの頃より講道館では有段者は黒帯を締めるようになり、これがまた「嘉納の黒帯」として一層講道館の評判を高める材料となった。嘉納師範は、この当時で最も記憶に残っている出来事として、当時の最大派閥である戸塚派楊心流 戸塚彦助氏が講道館に教育法の視察のため訪れた際のことを挙げている。視察していた戸塚は、西郷四郎の乱取を見て「あれが名人というのでしょうな」と感想を述べたという。師範は、当時柔術の最大権威であり、自分の師匠も苦しめられた戸塚派の代表から、自分の育てた西郷についてこのような評価をもらったことを心底喜んだ。それは譬（たと）えることの出来ないほどの愉快であったという。

富士見町時代に入門し他日名を成した者は、先述の横山作次郎、嘉納徳三郎の他、冷泉爲勇[114]、本田親民、若槻禮次郎[115]、戸張瀧三郎、財部彪、本田存、肝付宗次などがいるが、特筆すべきは広瀬武夫の入門であろうか。海軍兵学校のあった築地から広瀬武夫や財部彪などが熱心に稽古に通っており、兵学校が広島県江田島に移るに際し、広瀬らの熱心な働きにより兵学校内に柔道科が設立

されるに至っている。明治21（1888）年９月のことであった。この江田島の柔道場は「第一分場」として開所し、明治42（1909）年の財団法人講道館設立まで運営された。第一分場の入門者第１号は、海軍兵学校教官の八代六郎[116]であった。また、これに先立つ明治20（1887）年には、富田常次郎の韮山赴任に伴い、「韮山分場」も設けられている。

◆富士見町今昔

講道館の名声が高まるに従って門人も激増し、富士見町移転当時は100人程であった入門者は、明治22（1889）年には1000人に迫る程になっていた。前項で述べたように門人らは〇に一文字、羊羹色の紋付短袴で市中を練り歩き、一種の東京名物となっていたようである。ある時などは横山、山下義韶、西郷、宗像逸郎ら10数人で飛鳥山に花見に行き、土地の破落戸（ごろつき）50人ほどと大乱闘になったこともあった。講道館連は、棍棒で殴りかかって来る破落戸らを素手で投げ飛ばし蹴散らした。そして勝鬨（かちどき）をあげて意気揚々と富士見町道場に戻ったは良いが、腕や顔のアザは隠せず嘉納師範の知るところとなり、皆で２時間正座の罰を受けたという[117]。

富士見町道場は、現在桜の名所となっている千鳥が淵に面した所、現在のインド大使館があるあたりである。千鳥が淵や、お堀から臨む皇居は変わることなく、明治の面影を今に伝えている。明治22年３月、品川子爵の帰朝に伴い、講道館は本郷の真砂町へ引っ越すこととなる。富士見町時代は約３年間と短い期間ではあったが、講道館発展の礎（いしずえ）を築いた時であったと言えるであろう。

富士見町道場

所在地：麹町区富士見町1-1
現在地：千代田区九段南２丁目
道場の広さ：40畳
期間：明治19年２月～明治22年３月
明治22年３月までの累計入門者：約1000人



富士見町道場外観図

真砂町道場

◆品川子爵帰朝にともない移転

講道館は、明治19（1886）年から麹町区富士見町[118]の品川弥次郎子爵邸を借りうけ、道場として運営を行っていたが、この度品川子爵の帰朝が決まり、邸宅を空け渡すこととなった。嘉納師範は、新たに講道館を移す場所を探して方々手を尽したようである。富士見町道場のすぐ近くには帝国陸軍軍吏学舎があり、そこに隣接して相撲場が設けられていた。約1500坪ほどあり、当時は何用にも使用されていなかったため、師範はこの敷地に道場を建設すべく、当時の陸軍大臣大山巌伯爵に２度に亘って願書を奉じている[119]。しかしこの地は折り合いがつかず、品川子爵と桂太郎陸軍次官の好意により、かわりに少し離れた本郷区真砂町[120]右京（うきょう）山にある陸軍省の建物を借り受けられることとなった。明治22（1889）年３月のことである。富士見町時代の３年間で、講道館員は実に10倍にも膨れ上がっており、40畳の道場ではいささか手狭になりつつあったという事情もあった。借り受けた平屋づくりの木造は、はじめ54畳[121]であったがすぐに70畳に増築されている。ここが講道館本館となり、併せて嘉納塾成年舎も置かれた。また、富士見町にあった道場は、ふたたび麹町区上二番町[122]神代（こうじろ）氏宅に曳き移され、講道館麹町分場として運営が続けられた。

同年５月11日、嘉納師範は大日本教育会の招聘に応じ、「柔道一班幷ニ其教育上ノ価値」と題した講演会を教育会会議室において行っている。この講演会には、榎本武揚文部大臣やイタリア駐日公使など、内外の名士が出席しており[123]、世間の講道館柔道への関心の高さが窺えよう。師範が、柔道を体育法・勝負法・修心法の３つの目的から考究する方法をこの時期には確立していたことは、前号で既に述べた。この講演では更に前記の目的を達成する方法として、乱取・形・講義・問答にも触れている[124]。そして柔道の教育観点からみた価値を主張し、学校教育に科目として採り入れるよう訴えている。講道館創始からわずか７年で、柔道が各界著名人らの耳目を集め、また学校教育採用を謳うことが許されるほどの認識を得つつあったことは驚嘆に値する事実であろう。

◆師範の柔道講義

この頃、嘉納師範の講義や技の解説は具体的にどのようなものだったのだろうか。体育法・勝負法・修心法などの講義については前号で述べたので、今回は技の解説についての資料を紹介する。次に示す資料は、「学習院」と記載された用箋に書かれた師範の柔道講義覚書である。具体的な執筆時期は不明だが、学習院教頭の職に就いていた明治22年までに書かれたものと想像される。特に内股についての解説部分を掲げよう。師範の筆を伝えるため、少々読みにくいがカタカナ表記のまま掲載する。また原本に抹消がある場合、見せ消ち は○○で表し、その後に「　」で訂正部分を示した。挿入句がある場合、◎で表し、その後に「　」で挿入句を示した。塗抹は省略した。


ベルリンのカール･ギュンター写真館にて撮影した師範肖像写真

内股

内股ニ~~逆~~「大」内股、小~~引~~「~~大~~」内股、高内股、送内股ノ別アリ、

大内股トハ、左向ノトキ左ノ手ハ相手ノ右襟或ハ脇下ヲ取リ、右手ハ相手ノ上袖ヲ取リ、少々前ヘ引キ◎「上ケ」乍ラ◎「~~土~~」左へ＜ト相手ノ体ヲ寄セ、稍ヤ◎「相手」我カ体ニ近ツキ、~~相手~~（相手ノ体ノ置位ヨリ云ハヾ）左前ノ向ニ傾キ、左足ニ体ヲ乗セ、右足最モ我カ体ニ近ツキタルトキ、我ハ左足ノ股ニテ相手ノ右足ノ股ニ掛ケ、上ヘ後ロヘト上ケル、同時ニ我カ右手ハ、相手ノ袖ヲ我カ腰ノ方ニ近キツケルナリ、

小内股ハ、体ノ作リ方ハ大内股ト大体同シコトナレトモ、~~向~~我カ力ヲ入ルヽ方向ニ相違アルナリ、小内股モ~~少~~手ノ方向ハ同一ナレトモ、前右ヘ前右ヘト引キ付ケルナリ、此クシテ相手ノ体力~~先~~前ノ如ク、前ヘ右ヘト傾キタルト


右京山の真砂町道場跡地で撮られた記念写真
（明治30年）

キ、我ハ体ヲ左へ少々廻シ乍ラ、相手ノ右~~足~~へ左足ヲ「股ヲ我カ左股テ」掛ケルナリ、又同時ニ右手ヲ引クナリ、此ノ場合ニ於テハ、相手ノ右足ハ我カ左足ニ接近スルコトヲ要セサルナリ、何トナレハ、掛カル所ハ、我カ体ヲ廻シ股ヲ入レルニアレハナリ、

送内股ハ、一度ニテ掛カラサリシ内股ハ向フへ送リ行キ遂ニ◎「相手ノ」後へ倒スヲ云フナリ、

高内股トハ、我カ右手ハ（左向ノトキ）相手ノ~~横帯~~「左」前隅帯ヲ取リ、◎「我カ」左ノ手ハ相手ノ左襟ヲ表テ取ルナリ、而シテ、相手ノ体ヲ前ニ崩シ乍ラ足ノ股ヲ大キク相手ノ左股ニ入レ、上へ後ロへトアケ、左手ハ我カ体ノ方ニ引キ投ケルナリ、相手ノ体 内股ノ内ニテ最モ高ク上ル故ニ、高内股ト云フナリ、[125]

色々な場合の内股に、それぞれ現在の技名称には無い「大内股」「小内股」「高内股」「送内股」と固有の名前をつけていることが分かり興味深い。また小内股について、はじめ師範は小引内股という名称を考え、その後推敲して小内股にしている点も、師範の思考過程が想像でき面白い。講義をすると同時に、門弟らも一緒になって研究を重ね、技が収斂・規格化されていったのだろう。師範はこの頃のことを「今から思うと師弟一丸となって修行に打ち込んだ楽しい時代でもあった[126]」と述懐している。

◆師範渡欧

明治22年９月、嘉納師範は宮内省御用掛として欧州へ視察に行くことが決まった。欧州の教育事情などの視察が主な目的である。１年以上にもなる長期旅行で、また現在の海外旅行のような気軽なものとは違う。万が一の場合生きて帰れるか判らない、そんな覚悟もあったのであろう。師範は種々の身辺整理を行っている。運営する弘文館は閉鎖を決定し、また出発の３日前の夜、嘉納塾生および門人らに「嘉納先生遺訓」と題する講義を行ったのであった。師範は柔道修行についての訓戒、また、昇段は最重要事項であるので師範外遊中は一時停止することなどをのべた。遺訓の一節が左記である。

殊に明年（明治二十三年）は我が帝国議会も始めて開会せらるる事であるから、是が為に一時世間も動揺することであろうと想うが、諸子は、かかる目前の刺戟に毫も動かされる様な事があってはならぬ。自分は、諸子よりは年齢に於いても亦世の所謂経験に於いても、多少勝れて居るが、併し今日の世の中に多くの望みは持たぬ。諸子は他日大に邦家の為に尽すべき青年である。従って今日は、一意専心大にその実力を養うべき秋であるから、決して本末を誤って軽率の事をしてはならぬ[127]

明治23（1890）年に帝国議会開院を控え、一時自由民権運動の盛り上がりは沈静をみている時期ではあった。しかし講道館員、嘉納塾生らは10～20代の血気盛んな若者である。世論や一種の運動に感化され易い時期であると師範は考え、くれぐれも軽挙妄動をするな、将来国を治めるために今は自分を修める時であることを、念を押して訓じている様子が分かる。師範が特にこの訓戒を述べたのには理由があった。遺訓講義に先立つこと約７ヵ月前の明治22年２月11日、大日本帝国憲法発布式典当日に、出席者の文部大臣 森有礼が国粋主義者の男に刺殺されるという事件が起こった。この男 西野文太郎[128]が講道館入門者であったため、当時講道館は警視庁から相当に調べられたらしい[129]。今をときめく大学出の文学士が、費用も一切取らずに1000人以上の若者を集め、またその若者も紋付着袴で市中を闊歩している―良く解らないが怪しいと疑われたのか、一時師範や門弟らに警察の尾行がつくほどであったという。この一件が師範の脳裏にあったのだろう。自分が日本を離れている間、前途ある彼ら青年が血気にはやり軽はずみな行動を起こして、その人生の道を踏み外さないよう、憂慮していたのではないだろうか。だからこそ、今は実力を蓄える時期である、と殊更に強調して訓じたのではないだろうか。特にこの時期、師範の側近であり講道館草創期を支えた富田常次郎、山下義韶、宗像逸郎、佐藤法賢らは柔道を普及するため皆地方に柔道教師として派遣されており、本館にはいなかった。このことも師範の懸念になっていたように思われる。

９月14日出発前夜、師範は部屋に古参の本田増次郎[130]、岩波静彌、西郷四郎、有馬純臣、樋口誠

康を呼んだ。そして講道館のこれからについてを話している。また本田、岩波、西郷の３名を館務処理担当に選び、本田に一切の費用を手渡した。本田を会計担当、西郷を道場指南、岩波を事務担当に任命したと想像される。さらに、この３名だけでは対応しきれなかった場合に備え、師範の兄である嘉納健作氏に真砂町道場のことを頼むことも忘れなかった[131]。そして、1200名余の館員らを残し、師範は欧州へ旅立っていったのであった[132]。

◆荒れる真砂町道場

師範のいない講道館を、館員らは盛り立て守ろうと努力した。入門者は順調に増えており、岩波、西郷、本田らは入門手続きや道場運営などは厳格に行っていたと思われる。しかし館務、特に会計業務の方ではすぐに行き詰まりを迎えてしまった様子が窺える。それは、23年２月28日、欧州滞在中の師範に届いた書簡の内容からも明らかである。西郷と本田からの書簡には、講道館の資金繰りがうまく行かないので、館の将来の進路を決定するため、師範には早急に日本に戻って来てほしいと懇願する内容が認(したた)められていた[133]。しかし、師範としても視察を中止してすぐに戻るわけにもいかないため、このときは返信を書いたのみに留まっている。

しかしこの後事態は悪化の一途をたどったようである。この時期、静岡の韮山中学校に柔道教師として赴任していた富田は、師範の友人である村田源三と大坪権六が富田を訪問したことにより、この講道館の窮状を知った[134]。西郷らが鬼の居ぬ間の洗濯よろしく、やりたい放題に金銭を使って暴れ、遂には師範の物にまで手を付けるに至った、と言うのである。村田らは、嘉納師範の友人として西郷に再三忠告を試みたが、受け入れられなかったという。

この西郷らの暴挙について、具体的に書き残している資料は無い。富田ら幹部が東京におらず実際に見聞していなかったことがその理由の１つであると考えられる。もう１つの理由は、嘉納師範がこの件について、晩年まで一切西郷を責めたり咎めたりする発言をせず、且つ詳細を語らなかったことが大きいように思う。西郷らも、はじめから師範に造反するつもりは毛頭なかったことは、23年２月に在欧中の師範に助けを求める書簡を出していることからも明らかであろう。

そして明治24（1891）年１月、師範の帰朝直前、西郷は師範への詫び状と「支那渡航意見書」を残し、講道館を出奔するに至ったのであった。船が着いた横浜埠頭で、出迎えの本田岩波ら館員からこの事実を告げられた師範は、気の毒なほどの落胆ぶりであったと言う。

紊(みだ)れた館規を引き締めるため、師範は、本意ではなかったであろうが本田と岩波を論旨退館とし、出奔した西郷は放逐とした。のちに本田岩波はともに許され講道館に戻っている。そして同年９月、師範は熊本第五高等学校に赴任する途上、博多駅にて西郷と再会を果した。その時の様子を、西郷の養子となった西郷孝之は聞き書きとして次のように伝えている。

> 四郎は師範に拝眉、先頃の行動を深くお詫びしているが、当時師範も言葉なく、四郎もただ頭を下げたままで、とめどなく涙を流していたと、某故老の話であった。その後改めて熊本に赴き、講道館を脱した事情陳述して師範のお許しを願った。[135]

言葉なく、２人向き合い気持ちを交わす情景が想像されよう。先述したように、師範は西郷の出奔の理由や西郷を咎める言葉を、後々まで一切語らなかった。詫び状の内容も公開しなかった。それが講道館草創の苦楽を共に、濃密な時間を過ごした愛弟子西郷への、師範の優しさだったのかもしれない。嘉納師範の死後、師範の手回り品から、西郷の詫び状と渡航意見書が見つかった。この手紙は師範遺族の手で西郷の遺族へ返されている。40年あまり、大事に西郷の手紙を誰にも見せずに手許に置いていた師範の心情は、察するに余り有るものがあろう。西郷へは次の六段証書も送られている[136]。「西郷四郎　講道館柔道創闢ノ際、予ヲ助テ投技ノ蘊奥ヲ極ム。其ノ得意ノ技ニ於テハ、幾万ノ門下未ダ其ノ右ニ出ルモノナシ[137]」

◆講道館闇黒(あんこく)時代へ

首脳を欠き、混乱を極めた講道館を再び立て直すべく、嘉納師範は韮山中学校に赴任していた富田を東京に呼び戻して、館務の取り仕切りを託した。また、師範のいとこである嘉納徳三郎にも嘉

納塾舎監を命じ、緩んだ風紀の引き締めにかかっている。しかし追い打ちをかけるように、24年春、真砂町道場として使用していた陸軍省の土地建物を返却しなければならない事態となった[138]。師範は仕方なく分館の麹町分場に一時講道館を引き上げ、ここを本館としている。修行者は増加しているにもかかわらず、真砂町道場から持ってきた70畳の畳が40畳の道場脇にうず高く積まれ、稽古も儘ならない状況であったという。更に嘉納師範は熊本第五高等学校への赴任が決まり、不安定な講道館を離れなければならなかった。以前のような問題が起きないよう最古参の富田や嘉納徳三郎がしっかりと館員連中を束ねてはいたものの、富田は一時講道館が消滅してしまうのではないか、と「講道館の闇黒時代」を大変心細い気持で過ごしていたという。しかし当の師範本人は回顧録を見る限り、この逆境をものともせず、むしろ逆境からこそ学びとるものが多いと考え、精力善用、自らの職務に努めていたように感じられる。

最後に興味深いエピソードを１つ紹介してこの稿を終わろう。明治24年１月９日、第一高等中学校[139]講堂で行われた教育勅語奉読式において、世に言う不敬事件が起こった。この一件については著名な事件なのでここで詳述はしないが、この当事者である内村鑑三は当時第一高等中学校教師で、真砂町のすぐ近くの本郷弓町[140]に住んでいた。事件に憤慨した一中生徒らは内村の教師辞職を求め、激昂し暴徒と化して連日内村宅を襲撃し、内村は心労がたたってか床から起き上がれないまでに弱ってしまっていた。騒ぎはなかなか収まらず、２月に入ってからも連日押し入ろうとする暴徒がおしかけていた。内村は既に死を覚悟していたらしい。すると、大声で「諸君！わが輩は内村君とは面識はないが、内村君が真の愛国者であることを知っている。今日偶然ここを通りかかったが、もしも諸君が内村君をやっつけるというなら、よろしい、わが輩が諸君のお相手いたそう！[141]」と叫ぶ声がした。窓をも割ろうとしていた暴徒らは、それを聞いて一斉に逃げ出したという。その声の主が、真砂町道場から出て来たところの嘉納師範だったからであった。



現在の真砂町は清和公園として
斜面を利用した緑地となっている

◆右京山と真砂町

真砂町道場のあった右京山は、現在の講道館のはす向かい、真砂町市場裏手の傾斜地一帯である。講道館のある春日町交差点は、東西どちらから見ても坂の下、すり鉢状の底の部分にあたる。交差点から東側、本郷方面に向かって富坂（鳶坂）が10メートル以上の急こう配で登っている。かつてこの一帯には高崎藩主松平右京亮（うきょうのすけ）の中屋敷があった。明治以後、陸軍省などの用地となり、そこを講道館が借り受けていた。小説『姿三四郎』に登場する右京が原の決闘場面のモデルはこの地である。明治26（1893）年末、講道館は小石川区下富坂[142]へ移転するが、この下富坂道場は右京山のすぐ向かいにあり、師範は講道館員らで記念集合写真を撮る際は、この右京山傾斜地を利用して撮影している。

現在は都営アパートが建ち、傾斜地の一部は清和公園として残っている。かなりの急こう配の公園で、園内には「右京山」解説のプレートも設置されており、地形と園内の木々が講道館の猛者が活躍した明治の空気をかすかに伝えている。またすぐ近くには、江戸時代から「本郷のクスノキ」「弓町の大楠」と呼ばれ名所ともなっていた幹回り８メートル以上の巨木が真砂町時代からも変わらず鎮座し、公園と併せて区民の憩いの場となっている。

真砂町道場

所在地：本郷区真砂町36
現住所：文京区本郷４丁目付近
　　地下鉄三田線・大江戸線春日駅から
　　徒歩１分
道場の広さ：54畳→70畳
期間：明治22年３月～明治24年春
明治24年春までの累計入門者：約1860人



嘉納師範

下富坂道場

◆百畳敷きの大道場

明治26（1893）年２月10日、熊本第五高等中学校校長として熊本に赴任していた嘉納師範は、文部省参事官に転任し、東京へ戻って来ることとなった[143]。当時、講道館は行き場を失ってかつて道場があった上二番町[144]に再び移されており、40畳ほどの狭い道場で、2700名余りもの修行者がひしめき合って稽古を行っていた。東京に戻ったことを機に、師範は道場拡張の画策を始める。そして、小石川区下富坂町[145]にあった病院を買い取り、改築・増築して新しい道場とした。これが下富坂道場である。

細長い溝のような小路の南北両側に建物が建っている造りで、突きあたりが道場であった。縦横は約15メートル[146]、やや変則的なＬ字形をした道場で、曲がっている部分に師範席があった。広さは実に107畳あり、これだけ広い道場は、当時日本のどこにも無かったという。さらに浴場と井戸も併設されていた。道場の手前両側に並ぶ建物は、洋風木造２階建１棟と和風平屋２棟からなっており、主に嘉納塾生らが起居していた。白山通り側の２階屋が成年舎で、舎生の部屋、師範の応接間と書斎、食堂やランプ掃除部屋などがあった[147]。その西にある平屋は幼年舎であった。当時は、永岡秀一、富田常次郎、横山作次郎、南郷次郎、柳悦多、立花種忠などがここで暮らしていた。ただ、彼らが起居する建物は病院を改築したものだったためか、どことなくじめじめと湿気を帯びており、あまり住み心地は良くなかったという。

翌27（1894）年５月20日、講道館は500名を超す人々を招き、盛大な新築落成式を挙行した。式での師範の演述を次に掲げる。

> 総て物には其外に顕るる形と内に存する宝勢との二あるものなり。此落成式の如きは、外面より見るときは一道場の新築落成式に過ぎざれども、其裏面を窺うときは、本館員が今日までなしたる事業の一部の成功を祝する式と見做すことを得べし。この道場の濫觴（らんしょう）は、今より十三年前、余が、或は寺の書院に、或は土蔵の内に少数の修行者を相手にして稽古したる時にあり。当時、世人が柔道に対して懐ける感情、今日の如くならず。種々困難を冒して漸くに之を継続し遂に今日、本館及分場員として三千有余の修行者を得、（略）本館員が柔道の本旨に違わず世の信用を得るに



数々の名柔道家を輩出した下富坂道場（大正９年）

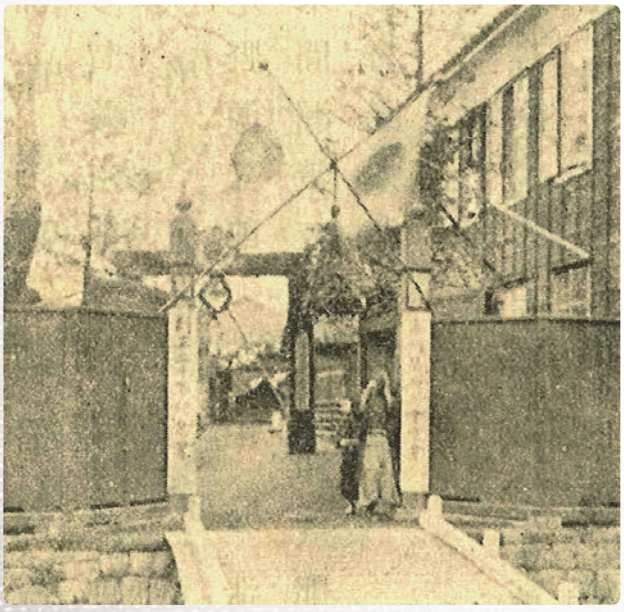
足る行為をなしたるが為なりと云わざるを得ず。是れ、余が本館員に対し満足の意を表せざるを得ざる一なり。次に本館の成立は諸子の能く知らるる如く、斯道に志す者に斯道を伝えて国に尽すの精神に出でたるものなれば、創立の時より今日に至るまで、本館の役員教師に対して未だ些少の給料報酬だも与えたることなく、又本館先進の者、後進の者を導き、後進の者、他日また先進者となりて其後進者を導き、斯の如くして此三千有余の修行者に業を授くるの途を得たるなり。故に、講道館の事業は余一人の事業にあらずして、館員共同の事業なり。共同能く事に従い、今日の結果を見るに至りたるは、余が一般の館員特に先進の輩に満足の意を表せざるを得ざるになり。本日、余はここに此式を挙行するに当りて聊か既往に徴し、余が感する所を述べ、将来斯道の為め益奮励し、大に国家に尽す所あらんことを館員一同に冀望するものなり。[148]

筆者は、講道館が新しく「柔道」を興してわずか13年で門弟3000人を擁する一大団体にまでなったことに、改めて驚きを禁じえない。加えて、この時に至っても講道館運営は師範１人の自弁によって賄われていたことも特筆すべき点であろう[149]。師範はこのような繁栄をみたのには、利益にとらわれず柔道のために尽した館員全ての功績であると述べ、感謝を伝えている。

また来賓には勝海舟、品川彌二郎、田中光顕、渡邊昇、伊丹重賢など錚々たる面々が名を連ねており、改めて嘉納師範の人脈の広さが窺えよう。また諸流派の柔術家らも、講道館道場落成を心から喜び、式で各流派の形演武を披露し祝意を伝えた。竹内三統流の佐村正明[150]、良移心頭流の中村半助、澁川流の久富鐵太郎、天神真楊流の井上敬太郎などがこのために参集している。そして嘉納師範も、この日のために形を創作し、山下と小田勝太郎を相手に披露した。形の内容は以下に詳しい。

講道館の形とあるは、此度、師範の作為せられし者にして我等未熟の者、容易に其真象を知ると能わず。雖ども山下君を相手となして演ぜられし形は、外観上恰も起倒流の形に彷彿たり。他の小田君を相手とせられし者は、恰も講道館勝負の形の如し。打込、横打、及び蹴掛なり。以上各三手にして小田君を相手とせられし者は、最初三手を静かに捕りて、打込、横打、蹴掛等、此場合に応じて此如き場合には此の如く其の機に投ずるものなりという事を、観者に向い、先ず会得せしめ置き、次に気を込めて打ち、若しくは蹴らしめて、其場合に応じ、電光石火の如く取扱われしなり。前陳の如く此二種の形は、急遽の際に作為せられし者なれば、未だ確たる名称なきや。又聞く、或は、これあらむ。吾れ未だこれを知らざるなり。[151]

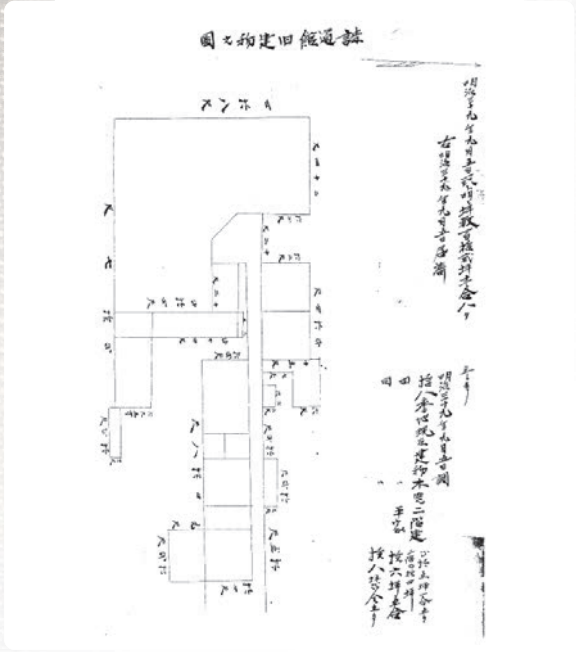
勝海舟はこの師範と小田の形を見、その森厳に深く感じ入った。そして認めたのが、今も講道館に残る「無心而入自然之妙 無為而窮変化之神」の扁額である。



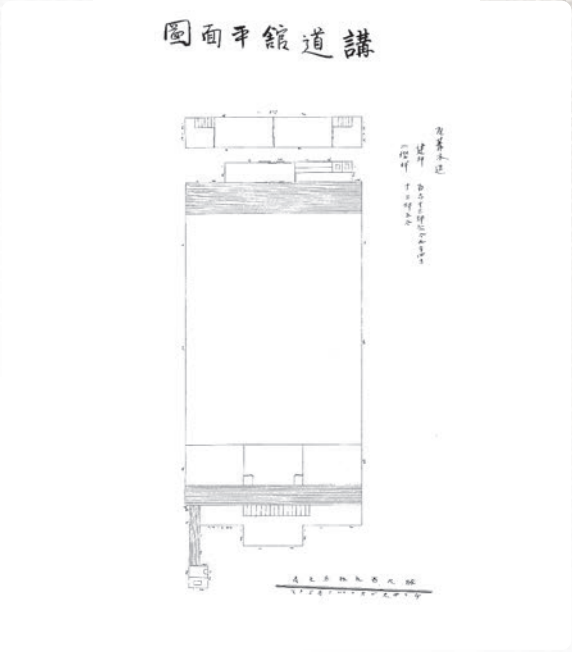
白山通りから見た下富坂道場入口

◆規則等の整備

道場の移転に伴い、増加する門人らを纏める目的で、講道館ではさまざまな規則を整備している。まず27年３月には入門規則や修行者心得の改正が行われた[152]。さらに師範は、講道館の拡張などを話し合うため評議員会という組織も設けている。委員は在京の幹部館員らで、山下義韶、富田常次郎、岩崎法賢、嘉納徳三郎、岩波静彌、小田勝太郎、川合慶次郎、大島英助、浦太郎、志立鐵次郎から成っていた。また、一度廃れていた講道館倶楽部を再興させたのもこの時期である。館員相互



下富坂道場図面。
下側が白山通りにあたる



改築後の下富坂道場図面

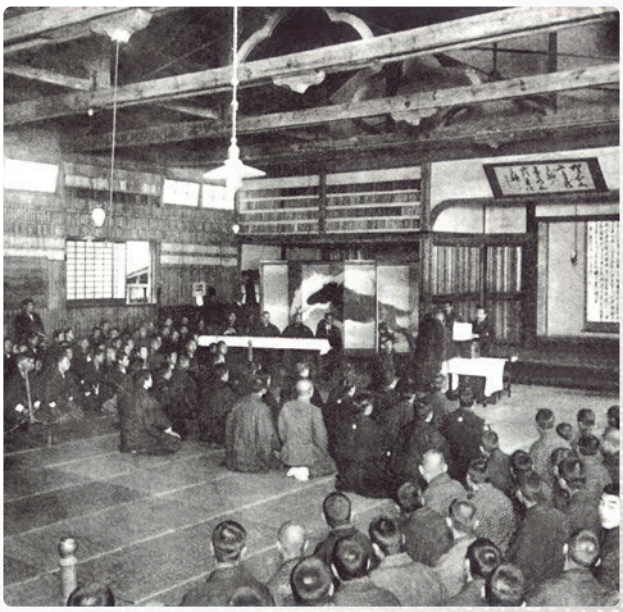
の親睦を図る目的の倶楽部で、隔月で親睦会を催すなどの活動を行っていた。

さらに明治31（1898）年には、若者へ立身の方針を示し心身を鍛錬させるため、造士会という団体も組織した。造士会はその趣旨に則って、塾舎を設けて子弟を薫陶すること、道場を開いて柔道はじめ諸武芸や体操を教授奨励すること、雑誌を発行して造士会の趣旨の貫徹を図ること、の３事業を行っている[153]。その他、翌32（1899）年に講道館有段会および研究会を組織し[154]、柔道教授法や乱取についての研究にも熱心に取り組んだ。この時期は、下富坂道場新設を契機として、嘉納師範の事業構想が段々と会の整備や規則という形に具現化されていった時期と言えるであろう。

この頃講道館に入門した者として、大角桂嚴、緒方善雄、徳川慶久、杉村陽太郎、佐村嘉一郎、徳三宝、三船久蔵、半田義麿などが挙げられる。また、柔術諸流の剛の者らが或は勝負を挑むため、或は彼我の力量を図るため、講道館を続々訪れてもいる。関口流の関口幸五郎、眞蔭流の今泉八郎門下鷲尾春雄、制剛館の八谷護、戸塚派楊心流の大竹森吉、本郷体育館の八木寅次郎など、みなその後は講道館に入門し有段者にまでなった[155]。彼らが自分の道場で講道館柔道を教授するようになったことも、講道館発展の一助となったと考えられる。

◆道場の増築

道場新設を呼び水に爆発的に入門者の数は増え続け、明治40（1907）年には8500人にまで達していた。嘉納師範は前年より更なる道場増築を企図し、下富坂道場隣接の土地買収を進め、そして40年３月、207畳の大道場が完成する[156]。同時に旧・下富坂道場はそのままの形で大塚[157]開運坂へ移され開運坂道場となった。当時最新の建築法が用いられた[158]縦約30メートル横約15メートルもある立派な道場であった。浴室、更衣室、洗面所まで完備されていた。また、世界で初めて柔道場



下富坂道場での昇段式の様子

にスプリングが導入されたのも、この下富坂道場である。正面には、木島櫻谷（このしまおうこく）画の八曲一双屏風「奔馬」が置かれ、また前述の勝海舟筆扁額が掲げられた師範席が設けられて、嘉納師範は忙しい合間を縫ってこの師範席から稽古を見守った。ある寒稽古期間中、道場番であった半田義麿が道場準備のためランプを付けに真っ暗な道場へ入ったところ、凍て付く暗闇の師範席に嘉納師範が既に端座しており、半田は驚愕すると共に、師範の柔道に対する想いを感じ、畏敬の念を新たにしたという。

破風のついた立派な正面玄関は三段以上（後に四段以上）の高段者のみしか出入りが許されず[159]、入門したての修行者らの憧れとなっていた。二段以下は裏の一般入り口から下足番に下駄を預けて入っていたという。また、入って左の部屋が入門受付となっており、入門が許される毎日曜日には朝早くから入門希望者が詰めかけた。希望者は、取次の書生に保証人付きの入門願書、履歴書、白扇を差し出し、２時間ほども本田親民幹事の話を正座で伺い、５ヵ条のご誓文を復唱した上でやっと入門誓文帳への署名を許された[160]。入門を許されるまで厳めしい敷居の高いやり取りがあったものの、こうして入門した者は「本館入門」といって、地方の各有段者会を通して入門した者に対して、自分は直弟子である、という誇らしい意気込みを持って修行に臨んだようである。

道場の裏手には井戸があり、稽古後は皆ここで井戸水をかぶった。あまりに大勢の者が裸で屯する様子が見苦しかったのか、井戸の場所を道場裏の目立たない場所に移動したこともあった。それでも大量の修行者には対応しきれず、当時講道館向かいの真砂町に高名な中山博道の剣術場があり、皆そちらにまで井戸を借りに遠征し、剣術場有信館から苦情を言われることもあったという。

講道館下富坂道場の場所は富坂の底の部分にあたり、海抜10メートル程のかなり低い土地である。そのため、大雨の際には何度も浸水水没し、その度に稽古をしばらく中止するなどの被害に見舞われている。講道館の記録にも、明治41（1908）年夏の大雨や、夏目漱石が「修善寺の大患」に遭った明治43（1910）年の東京大水害の際などにも水没した様子が描かれている。道場新築後すぐの41年の水害の際の記録を掲げよう。

或る日の夜半、関東一帯に台風が襲来し、その被害は甚大であった。春日町かいわいでも床上浸水があり、汚物塵埃が浮流して臭気に充ち、頸に達する水深の所もあった。全く嘘のような実話である。凄まじい嵐の音に眠りもやらず、覗き見ても停電暗黒で外界の様子は皆目判らない。東の白む頃漸く静けさを取り戻すと、激流の音が聞こえて来る。急いで降りると、階段の下の二つ目まで既に水浸しになっている。あわてて手近の襖をあけると、寝床ぐるみ畳諸共浮き上がり、白河夜船の西瓜頭が並んでいる。呼びさまされて飛び立つ足元に水が湧き上る。やがて机も本箱も泳ぎ出す始末、手早く二階に避難させて道場へと急いだ。

道場は驚いたことに遠の昔に、奇麗に片づけられていた。二百七枚にのぼる畳から師範席の分まで、一枚も濡さず階上に積み上げられ、先生が大切にして居られた木島櫻谷画伯の逸品、「奔馬」の金屏風を納めた二つの木箱、頑丈な出来で、馬鹿大きく重くて始末の悪い代物、まで無事に処置されていた。迸る濁流と先きを争う競争だ、何という早技だったのだろう、全くの奇蹟だ。その選手は強豪を誇る門脇、藤、徳三寶その他在塾の諸君で、階段の昇降は面倒とばかり、階上の襖を取り払い、下から畳を投げ上げたのだとの話だった。

（略）水浸りの塾の室内から、はしゃいだ喜々たる叫び声が聞えて来るではないか、何んだろうと寄ってみると、大きな鯉や金魚を追い廻して水しぶきを上げているのであった。裏の地続きに竹垣一重で川端玉章画伯の屋敷があり、氾濫で庭池の飼い魚が逃げたのであり、災害のほほえましい一と駒だったのだ。

空腹をかかえて塾生幾人かを伴って、皆真裸で本郷三丁目へパンなどの食料買入れに行った。そして交番脇の水道の水も貰って帰った。

（略）その午後報告をかねお詫びのため先生（著者註：嘉納師範）にお目にかかった。「何事も修行だ、損害など大事ない。今度は何も大げさに考える問題ではなかったが、対処策は事の大小に拘らず最善を尽すべきもの、事

後にはよりよい方策がなかったかよく考えてみる。それが経験を将来に生かす上に大切だ」と先生は仰せられた。[161]

水没する道場の畳を濡らすまいと、豪雨の中で徳三寶らが畳を２階へ投げ上げたエピソードは、彼の気風また当時の塾生の雰囲気をよく表しているように感じられ面白い。そして師範の、過去を悔いる必要はない、その経験を将来に活かすことが肝要であるという教えもまた、師範らしい言葉であろう。

◆天下の講道館へ

明治42（1909）年５月、嘉納師範は講道館柔道を後世へ伝えるため、また更なる発展を目指すため、講道館を個人経営から財団法人とすることとした。理事には師範、若槻禮次郎、矢作栄蔵を据え、また監事は渋澤栄一と柿沼藏二に委嘱している[162]。他に、道場運営を円滑に進めるため、初めて指南役と道場幹事という役職も置いた。指南役は、横山作次郎と山下義韶が任命されている[163]。

また、師範は柔道衣の改良にも取り組んでおり、明治41年７月15日には、今日以降袖の長い柔道衣を用いるように、との掲示も出されている[164]。現在では長袖が当たり前であるが、当時は慣れないのか「やり難い」と不満の声も多かったらしい。袖の短い柔道衣を着て道場に出ることさえ禁じられたため、一時は講道館門前の商店などでは、袖の継ぎ足しを請け負う所もあったという。下富坂道場のあった春日町交差点は、都電の乗換ターミナルとして、都会の賑わいを見せる場所となりつつあった。しかし、講道館の廻りだけは柔道衣をかついだ野武士のような輩が大勢出入りし、一種異様な雰囲気を醸し出していた。

師範はこの頃より、講道館の責務は柔道教育法の統一と、柔道教師の正しい育成にあると考えていた。そして、正しい柔道教師育成こそが、世界に広がりつつある講道館柔道の正しい普及につながる、ということを実感していたと思われる。

> 今後も此勢を以て発展し行かば、講道館柔道は有望なる将来を有するものと云ふを得べし。此時に当て講道館の最も大切なる務は、教育法の改善と統一とにあり。即ち教育の任にあるものは、平素研究を怠らず互に連絡を保ちて、最も進みたる教育の広く内外に行はるる様に務むるにあり。[165]
>
> 凡そ人を教育するは実に容易の業にあらず。畢生の力を尽して猶且つ其効なきを恐る。況や自ら修めず自ら忖らず、自ら信ぜず自ら力めず、唯道場の教授に其偉大な効果を望むが如きをや、争て其目的を達すことを得べき。政治、増産其他に対立して敢て譲らざらんとせば、柔道の任や甚た軽からず。身体強健に精神操業、両ながら健全なるの責任豈又大ならずや。[166]
>
> 講道館柔道の漸く進みて日本の柔道より世界の柔道に移らんとする勢あるに至りたれば、柔道教授法の如きも、益々研究を加えて完全なる域に達せしめんことを期せざるべからず。而して、今後の柔道家は、昔日の如く、力量さえあれば他の非行は深く咎めず、という時代に非ず。柔道の技量進む程、人格も高まらざるべからざる筈なり。故に、将来の講道館員は、技量よりも人物に重を置かざるべからざれば、人格に於ては、寸毫も非難なき様勉めざるべからず[167]。

柔道修行者は地方更に海外にも広がりを見せ、昭和８（1933）年、下富坂道場が水道橋畔に移転する頃には、入門者は優に７万７千人を超えるほどになっていた。

◆下富坂道場の現在

講道館下富坂道場は、白山通りと春日通りの交差点から、北西に10メートル程入ったところにあった。昭和８年に講道館が水道橋に移転した後、建物は大国旅館（のちホテル大国）として使われていたらしい。現在の講道館の前の交差点を北に渡ってすぐのところに都民銀行やガソリンスタンドがあるが、今も「小石川大国ビル」としてその名が残り、下富坂道場の場所を偲ぶことができる。両脇に嘉納塾や師範邸、横山作次郎邸、また突きあたりに道場があったその小道は今も春日通りに並行して残っている。約40年もの間講道館の第１道場として存在した下富坂道場では、数多くの名柔道家また名勝負が生まれ、さまざまな物語にもこの道場が描かれ、今に語り継がれている。

下富坂道場

所在地：小石川区下富坂町18
現在地：文京区小石川1-13
地下鉄三田線・大江戸線春日駅から徒歩1分
道場の広さ：107畳（～明治40年）→207畳
（開運坂道場と併せて314畳）
期間：明治27年～昭和8年
昭和8年までの累計入門者：約77000人



大正３年の紅白大勝負

開運坂道場

◆大塚坂下町へ転居

明治40（1907）年頃、嘉納師範は小石川区大塚坂下町[168]域にかなり広大な土地を買い求めた。もともとは明治36（1903）年、増え続ける清国留学生に対応するため、同町に宏文学院大塚分校舎を創設しており、その付近を併せて買ったということらしい。最初8000坪ほどで、その後少しずつ買い足したその土地に、師範は更に自宅、講道館道場、嘉納塾宿舎などを建てる画策をしている。坂下町は当時まだ辺鄙な場所で、一面畑地で人家もあまりなかったため安く土地が手に入ったという。同年３月、小石川区富坂下に207畳敷の堂々たる新・下富坂道場が完成したことは前回述べた。そして下富坂にあった旧道場は、出来る限り原型を保ったまま修行者らの記念碑的存在としてこの坂下町に移されたのであった。また、その隣に師範の新邸も建てられ、明治41（1908）年11月に引っ越しを行っている。移された道場は建物前の坂の名を取って開運坂道場と命名され、その開場式が42（1909）年４月18日に多くの名士、柔術家らを招いて盛大に執り行われた。

これら嘉納邸落成式や道場開場式の宴会の場に、説経節の家元・若松若太夫[169]が招かれている。若太夫はこの時期より、嘉納師範の援助を受けて説経節を精進するため、師範邸に住込みで修行を行うことになったのも、この時期の面白いエピソードであろう。

開運坂を昇る右手に嘉納塾、講道館があり、坂のつきあたりを右に折れた最奥のところが師範邸であった。後には師範邸隣に嘉納履正一家が居を構えている。また師範邸には見事な山荘風の庭があったが、これは師範が、画家であり造園研究家でもあった本多錦吉郎氏に造園を依頼して造られた庭であった[170]。

◆開運坂の由来

坂の多い東京でも文京区は特に多くの坂がある街だが、講道館道場が置かれた開運坂という名前の由来は長く不明のままであった。文京区教育委員会発行の『ぶんきょうの坂道』[171]でも、「坂の名の由来については、よくわからないが、運を開く吉兆を意味する、めでたい名をつけたのであろう」とのみあり、まことしやかに、坂の下を通る坂下通りが巣鴨刑務所に通じ囚人を送る道であったから不吉を忌む意味で“開運”と付いた、など



開運坂道場玄関。下富坂道場を移築したもの

とも言われていた[172]。しかし最近になって、この開運坂の命名には嘉納師範が深く関わっていることが分かった。

明治40年、このあたり一帯を師範が買った頃は、あまり人家も無かったためか、高低差のある土地に人の行き違いさえ困難な程の狭い道が通っているだけであったという。師範は、これからの街の発展や付近の住民の利便を考え、この斜面に、大きく立派な道路を敷いた。更にその道路を、私道とせず東京市に寄贈し、寄贈の際、記念にと請われて「開運坂」と命名したのだった。この名前について、師範が「新しく土地を開いたんだから、多数の人の悦ぶような名をつけたのだ」と語った言葉が残っている[173]。車もまだ少ない当時に、あまりに立派で広い坂道が出来たため、付近住民はみな驚愕すると共に師範のその度量に感嘆したという。

先述した説経節『ぬれ胡蝶』の中に「柔道の巻」という一節がある。ここにも開運坂命名の由来が描かれているので以下に掲げよう。

> 霜月半ばも早過ぎて、道にしも置く開運坂。此方に高き講道館。兄弟二人を伴うて、六十路を越えし足並も、鍛え上げたる柔道に、壮者を凌ぐばかり也。（略）元のコノ道は中仙道の裏、今こそコンナ立派な道に成ったけれど、昔はなかなかひどい道筋、ソノ向うの本伝寺まえなど、イヤハヤ傘を差しては行違いに困難な坂ゆえに、俗に傘すり坂というたそうな。（略）なかなかコノ小石川には、坂が多い所じゃ。今下りて来た開運坂は、アレハ嘉納先生が、アノ護国寺の裏手一体をお買求めになって、先生御自身におつけ遊ばしたと、伺ったことがある。それが今の開運坂じゃ。[174]

◆講道館本部として

開運坂道場開場式の翌日４月19日、講道館は本館機能を師範邸のある大塚坂下町114番地に移している[175]。そして併せて、下富坂道場を講道館第一道場、開運坂道場を講道館第二道場と称することも発表された。下富坂道場から開運坂道場までは３㎞ほどの距離である。それほど離れた場所でもないので、各人の都合によってどちらの道場で修行することも認められた。



開運坂の講道館

この時期の稽古時間について、師範の愛弟子である下村宏[176]は「（開運坂道場は）嘉納塾の塾生、次に安房育英会寄宿舎、西摂寄宿舎、及 付近の人々とで、下富坂道場の午後二時より六時までの稽古の後を受け、六時より九時頃まで稽古して居る。即ち講道館の稽古は毎日午後二時から午後九時まで丸半日稽古して居る、其の後半を出来得る限り開放的に、学生と云わず、実業家と云わず、少しも心置なく稽古のできる様にするという使命を、この古い道場が果している[177]」と自負を込めて述べている。

同年５月に講道館は財団法人となる。師範は、この２つの道場を皮切りに東京市内、全国各地、ひいては世界各地に講道館道場を設けようと企図していた。財団化後すぐの師範講話において、講道館本館ならびに師範を頂点に置き、各道場には指南役、その下に道場取締役、世話掛を置いて講道館柔道の正しい普及を図らん、とその意気込みを門人らに訴えている。現に、下富坂道場指南役には横山作次郎、開運坂道場指南役には山下義韶が任命されている。しかしこの明治42年の時点で既に危惧されていたのは、その道場の統一法であった。統一のためには正しい講道館柔道を普及する正しい柔道教師を育てなければならず、その育成方法について師範は試行錯誤を重ねていたようである。各地にどれだけ道場が増えようとも、それを統一するのは講道館本館である、と師範が再三に亘って述べていることからも[178]、その乱れを危惧する様子が窺えよう。

開運坂道場は、女子柔道の教授が本格的に始められた場所でもある。明治中頃から、師範は何人

か女子を内弟子として家に置き、柔道教授を試験的に行っていた。女子の柔道が有益なものであることを調査・実践するため、この女子部に師範は特段気を配っていたと思われる。はじめの頃は入門においては家庭調査や師範直々の面接が行われ、健康診断書・戸籍謄本の提出が義務付けられるなど[179]、厳しい関門が用意されていたことからも、その様子が窺える。やがて次第に柔道が女子の心身の健康に与える効果に自信をもつようになったようである。大正10（1921）年には、堤という教員の女性が柔道を習いたいと師範邸に住込んで直々に教えを受けており[180]、こうした女子の柔道就業希望者が増えるに従って、師範も本格的に女子柔道指導を始めようと考えたのであろう。大正12（1923）年、本田存を指導者に据え、開運坂道場に正式に女子部が設けられた。講道館女子部は師範直属の部として、本部の師範膝下で大事に育まれていった。昭和６（1931）年に到って女子部にも入門誓文帳が設けられ、芥川綾子、森岡康子、乗富政子らが署名捺印を行っている。開運坂道場は女子控室と道場とが別棟になっていたので、控室から坂下の道場までは狭く急な階段で繋がれていた。また、古い建物であったので畳にバネが無く固かったり、雨漏りや隙間風などに苦慮したりと、大変な面も多かったようである。しかし、この道場で長く稽古をした芥川女子参段は「周囲が閑静で薄暗いのがいかにも古い歴史を持つ道場にふさわしく思われ（略）不自由は少しも苦になりませんで、却って昔からの道場でお稽古する事の出来るのを嬉しく思っておりました[181]」と往時を述懐している。

◆大塚坂下町と師範

嘉納師範は、先述したように住民の利便性を考えて道を敷設するなど、地域に根差し、また文化的にも大塚を盛りたてて行こうという意図を持っていたようである。講道館本館の近くには、山下義韶、村上邦夫を始め、鵜沢孝や綿貫哲雄など講道館・師範関係の者らが多く移り住んだ。町の自治にも積極的で、町会の設けが無かった坂下町に町会を設立したのも嘉納師範であった。近くに住む河野廣中氏[182]とともに発起人として名前を連ねている記録が残る。

大正10年に設立された大塚坂下町会の設立趣意で、師範は次のように述べている。

> 大塚坂下町は戸数凡そ千五百人口七千に達するにも不拘（かかわらず）、従来統一したる町会の設けが無かった為にどれだけ不利益を受けて居るか分りません。市又は区の理事者のみに一任して居たが為に、随分打ちやり放しになって居ることも少なくないと思います。教育のことでも衛生のことでも、道路も上下水も全くひどい有様であることはお互に毎日眼の前に見て居る如くであります。殊に我町の如き場末の新開地には特別の利害があり市区の中央部とは全く事情が違うのでありますが、凡て一向顧みられず、子供は二部教授を忍び、伝染病は多く、泥濘塵埃の道路に苦しんで居るではありませぬか。是れ皆町民が自治の念に乏しく一致団結して主張すべき事も黙って居るからであります。凡そ自治と云うことは隣保相助けて共同の事を行うを云うの外はないので、近き処から始めて広きに及ぶのでありましょう。[183]

またこの町会独特なものとして会申し合わせ事項が挙げられよう。

一、各人の時間経済を重んじ、模範的に時間を励行する事
二、本会は冗費を省き、会の費用を以て酒食を為さざる事
三、本会は会の基礎を堅実にし、町内の円満を期するため直接選挙に関係せざるものとす
四、本会の承認なき、諸寄付金及物品の押売一切に対しては、之を謝絶する事
五、葬儀の際に於ける、茶菓券又は菓子等の贈呈は、絶対廃止する事[184]

効率を重んじ、精力善用主義を掲げた嘉納師範の意向が良く反映されているように感じられる。

嘉納師範にまつわる不思議な話として時折見かけるものに、「嘉納師範は自宅から後楽園の講道館まで地下トンネルを通してそこを歩いて通っていた」という話がある。後楽園の講道館とは下富坂道場のことで、坂下町の自宅からは３㎞程も離れており、そこにトンネルを通していた、となるとかなりの大工事で少々無理があるように思われる。しかし無理があるからこそ、東京の地下に拡

がる秘密として、半ば都市伝説のように語られてきたようだ。

実際に資料をひも解いてみると、大正10年の師範日記には「大塚の師範邸から、講道館に続くトンネル工事が決定する[185]」との記載があり、トンネルが掘られたことは事実であった事が分かる。ただ、下富坂道場までもある長大なものではなく、開運坂上の師範邸から坂の中腹にある開運坂道場までの坂の高低を利用したごく短いトンネルであった。師範邸庭の木の根元に入口があり、雨の日でも濡れずに道場に通える、という利便性のために効率重視の師範が造らせたものであったらしい。

◆嘉納師範逝去

昭和８（1933）年、講道館は開運坂と下富坂とに道場が分かれている不便を解消するため、水道橋駅畔に移転をし、本館機能と道場が１つに統合されることとなった。ただ講道館自体が水道橋に移転した後も、嘉納師範、また嘉納履正一家はこの開運坂の邸宅に住み続けている。

昭和13（1938）年、第三五回国際オリンピック委員会がカイロで開かれることとなり、嘉納師範はＩＯＣ委員として出席するため海路エジプトへ向かう。この会議は、日本の宿願であった昭和15（1940）年オリンピックの東京招致を確認決定する重要なものであった。師範は七九歳の高齢にも関わらず、反対派多数の中で連日の会議をこなし、東京オリンピック招致を成功させこの重責を果たしたのであった。その後アメリカ経由で氷川丸に乗船、帰国の途に就いた師範だったが、５月１日俄かに発熱、肺炎を併発し、５月４日太平洋上にて帰らぬ人となった[186]。その時の様子は以下に詳しい。

> 大きな五輪旗がかかげられて、厳かに下船され、未亡人と嗣子履正氏とに付添われ、同行八台の自動車を列ねて、一路、東京、開運坂の嘉納邸に帰られたのである。（略）雨雲低迷して、小石川区坂下町の軒並に掲げられた弔旗を揺るがす夜、午後九時、嘉納先生の霊柩を納めた寝台車七五一一号は、居並ぶ愛国婦人会、青年団等の黙祷のうちに、開運坂をゆるやかに上り、明治四十年以来、住み馴れ給いし自邸に帰られた。自邸に帰り給いし先生の霊柩は、半田（義麿）、小田（常胤）、橋本（正次郎）、佐藤栄樹少将外四名にかつがれて、二階八畳の、在りし日の先生の書斎に安置され、厳かな対面式が挙行された。嘉納家の親戚一同、講道館関係者、平沼枢相、三土忠造氏等弔問客は、白百合の花で飾られた白木の霊柩の前に、感慨深く、頭を垂れていた。
> 自邸の裏では、先生の荷物であるラベルを貼り詰めたトランクが数個、オレンヂの箱が五個、グレープフルーツ一箱が運ばれ、「生前の先生は果物が大好物であった。こんなにオレンヂが…」と荷造りを解く人々の語る言葉も寂しい。二階霊前は生花、生果、花環で飾られ、その中に持ち帰られたオレンヂの一山が正面に供せられ、油絵の先生の半身像が、恰も生けるが如くで、人々の涙を誘うばかりであった。此の夜、霊前では山口大教正、司祭の慰霊祭が厳かに行われ、遺族親戚たちばかりの、しめやかな通夜が行われた。
> 翌七日、午後一時十五分、霊柩は、幾度か出て幾度か帰り来った此の邸を、永久に帰りまさぬ旅に出られた。[187]

師範は生前果物が大好物で、和歌山県加太の別荘地に蜜柑園を造るほどであった。また、少年の頃は蜜柑を一度に50個も平らげたこともあるという。その師範が皆へのお土産にと買ったサンキストオレンジが、師範亡き後に届き、門人や親族らの涙を誘う種となった。大塚開運坂の家々の軒先に弔旗を掲げ皆が弔意を表する様子も描写され、師範が、この町の人々から敬慕されていた雰囲気が見て取れよう。

翌日、講道館大道場において葬儀が営まれ、棺は千葉県松戸市にある八柱霊園に納められたのであった。

◆開運坂の現在

講道館開運坂道場のあった開運坂は、護国寺の近く、不忍通りの“坂下通り入り口交差点”を北上した左手に今もある。坂下にある交番も往時のままである。坂の幅もそのままで、車両が１車線ずつ通る２車線の道であるが、これが車も少ない明治40年に個人が造った道路だと考えると、その広さに驚くと共に、嘉納師範の先見の明に感嘆さ



現在の開運坂（案内板の脇に立つ嘉納名誉館長）

筆者は、当時師範の隣、履正氏の家に住んでいた嘉納行光名誉館長にお話を伺う機会を得た。坂を上り右に折れた最奥付近に嘉納師範宅があり、その隣に履正氏宅、おじ一家と並び、みな庭で繋がって出入りできたという。また近所にはドイツ文学者の芳賀矢一氏、最高裁判所長官の横田喜三郎氏、林愛作氏らも住み、北国銀行の寮などもあったとのことであった。現在、開運坂に建つ由来を示した案内板に講道館と嘉納師範のことが記述されており、この坂を行き来する人々が当時を顧みることが出来るようになっている。

せられることだろう。

開運坂道場

所在地：小石川区大塚坂下町114
現在地：文京区大塚６丁目
東京メトロ丸ノ内線新大塚駅より徒歩５分
道場の広さ：107畳（下富坂道場と併せて314畳）
期間：明治42年（開場式）～昭和８年
昭和８年までの累計入門者：約77000人



開運坂にあった講道館本部

水道橋道場

◆講道館文化会と師範の理念

大正３（1914）年12月、嘉納師範は、柔道を普及発展させ講道館の活動を円滑にするためには館員の横の連携や協力が必要であるとして、柔道会という団体を設立した。講道館を財団法人化した際に持っていた、修行法や教授法の統一の構想をより具体化したものであった。そして講道館札幌分場や講道館朝鮮支部などを開設し、正しい柔道の普及に努めている。また大阪にも講道館支部を開設しようと、土地の検分を行い、また発起人会をも開いていたことが資料に残っている[188]。

更に７年後の大正11（1922）年、柔道会は規則を改正し、講道館文化会と名称も変わった。嘉納師範は、講道館柔道の研究の結果、心身の力を最も有効に使用するという教えは社会の百般に応用できるとの考えに至り[189]、名称も柔道会から、より包括的な意味を持たせた講道館文化会と改めたのであった。この心身の力を最も有効に使用する、という考えは「精力最善活用」と略言され、師範の理念の支柱となっていった。師範は「先づ一身に関することから始め、社会国家の問題にも及び、出来るだけ無駄をせぬよう、能率を高めるよう百方努力しなければならぬ。この度講道館文化会を起し、人々に如何にすれば己を完成することが出来るかを示し、又如何にすれば社会に無駄がなくなり、健全なる発達を期することが出来るかということを説こうと思うて居る[190]」と、今後の展望を語っている。発表された文化会の宣言・綱領・事業を次に紹介しよう。

宣言

本会は精力最善活用に依って人生各般の目的を達成せんことを主義とす
本会はこの主義に基づいて

一、各個人に対しては身体を強健にし智徳を練磨し社会に於いて有力なる要素たらしめんことを期す
二、国家に就いては国体を尊び歴史を重んじ其の隆昌を図らんが為常に必要なる改善を怠らざらんことを期す
三、社会に在っては個人団体各々互に相助け相譲り徹底せる融和を実現せしめんことを期す
四、世界全般に亘っては人種的偏見を去り文化の向上均霑に努め人類の共栄をはからんことを期す

綱領

一、精力の最善活用は自己完成の要訣（ようけつ）なり
二、自己完成は他の完成を助くることによって成就す
三、自他完成は人類共栄の基（もとい）なり

事業

一、雑誌及図書を発行すること
一、東京及各地に講演会、講習会を開催すること
一、衣食住、社交、その他国民の幸福を増進すべき各種の問題につき研究調査し必要なる施設を為すこと
一、国民の道徳、体育、衛生に関する研究調査と必要なる施設とを為すこと

講道館柔道の理念を、武術的側面からだけでなく人間の生活すべてのことへ追究していこうとする、大きな理想を掲げた会であったことが分かる。

そして、これら理念を全うするための運営資金を募る目的で、財団法人講道館後援会が設立されたのであった[191]。昭和５（1930）年のことである。本部を日本工業倶楽部内に置き、会長は男爵・郷誠之助が就き、嘉納師範は相談役に就任している。この後援会発足の意図を、嘉納師範は以下のように語っている。

> 柔道は、これを正しく修行すれば、武術として価値のあることはもちろん、体育としても、知育・徳育としても大なる効果のあるものであることは、何人も依存のないところであるが、また、これを正しく修行しないときは、益するところよりその弊害のかえって大なる場合も無いとは限らない。だから、柔道修行者のかように広がりつつある今日、柔道の内容改善ということは、今日の急務中の急務である。よって柔道は、これを善用すれば国家発展の原動力となり、一歩をあやまれば、後世に害毒を流さぬと保証は出来ない。かように考えてくると、今日において、師範を補佐するに、学徳を備え、技術においても才幹においても勝れた人材を多く集むること、また師範の後継者として勝れた人物を得ることをもっとも必要とする。これには、それらの人に生活の安定を与えるだけの基金を準備する



水道橋畔にたつ講道館。１階は柔道衣の刺子模様。
２階角部屋が館長室、その上の「講道館」額は現在も講道館正面に掲げられている

必要がある。また、第二に、何事も進歩改良を要する時代において、柔道の研究も、武術とし体育とし、智徳の修養として、学術的の基礎によりてその進展をはからねばならぬ。それには、各種類の研究機関を設けることを必要とする。そのために、師範を助けて、それらの研究に従事する各種の専門家を集め、研究設備を造らねばならない。これらのことは、師範が自ら活動の出来なくなってから行おうとしても、すこぶる困難なることであるが故に、師範の活動力のある間に、この事業をなさねばならぬとの意見が、周囲に盛んとなり、遂にこの経済上不適当なる時期にかかわらず、あえて後援会の成立したゆえんである。[192]

言外に、師範自らの死後に訪れるであろう講道館の苦境を慮っての会設立であることが読み取れよう。資金を募り、講道館の財源を師範が元気な内に確保しておかなければ、との考えがあったように思われる。

◆水道橋への移転

昭和に入り、講道館の累計入門者数は40000人を超えるまでになっていた。修行者の増加によって下富坂道場はいつも修行者で溢れかえっており、文化会の研究調査を行う施設として使うことはおろか、普段の稽古さえままならない状況であった。また、下富坂道場と開運坂道場（講道館本部）が３キロほど離れていたため、何かと不便でもあった。そこで嘉納師範は、下富坂道場を増築し、そこに講道館本部事務所をも移す計画を立て、講道館後援会からの寄付金をもとに下富坂道場付近の土地買収に乗り出している[193]。

その後、この後援会の寄付金募集の主目的であった道場増設は、講道館50周年の記念事業へと発展して行くこととなる。昭和７（1932）年、小石川水道端の帝国陸軍造兵廠が小倉へ移転した跡を政府から払い下げを受け[194]、今まで開運坂道場と下富坂道場とに分かれていた講道館は、この地に一つに纏まり新築されることが決定した。嘉納師範の苦心の交渉の末であった。そして講道館創立五十周年記念建築期成会が新たに設置され、講道館後援会と連携を図りながら、新築に向けての運動が始まった。その主な活動は醵金・五十周年記念入門者の募集・後援会に申込まれた寄付金管理の３つで、建築期成会の会長には師範の従弟、嘉納徳三郎が据えられている。

師範は、この水道橋の講道館を、世界柔道連盟のような柔道の世界的組織の策現地、本拠地にしようと考えていた[195]。そして諸方面からの多大な援助を受け、昭和８（1933）年２月13日には地鎮祭が執行され[196]建築開始、翌９（1934）年３月21日に落成式が挙行されている[197]。設計者は、全国各地の第一銀行や台湾銀行などを手掛けた師範の教え子、西村好時（よしとき）氏である。また建設は大林組が担当した。

新たな講道館は、鉄筋コンクリート３階建て、総坪数1370坪の大建造物であった。１階にスプリングを入れた510畳あまりの大道場があり、道場内には師範席、２階に貴賓席と観覧席が設えられている。また庶務課、編輯室などの事務系事務所もあった。２階の角部屋は館長室、そして道場を見降ろす位置には畳敷きの高段者室があり、高段の指導者らが使用するためか、この部屋だけは昔時の下富坂道場を思わせるような古風な雰囲気が漂っていたという。また、館長室から続くとこ



講道館大道場にて行われた師範喜寿祝賀会。
中央奥は嘉納師範（昭和11年）

ろには20畳ほどの女子部道場もあった。ここは限られた指導者以外男子禁制で、廊下にも扉が設けられ、不用意に近づけない場所であった。また、地下には修行者のためにシャワーが設置されるなど、近代的な設備も兼ね備えていた。

11月23日・24日の両日には、新築なった大道場において講道館創立五十周年記念祭が盛大に執り行われている[198]。

◆師範没後の講道館

昭和12（1937）年の年頭より、講道館大道場貴賓席の一角に今まで道場に無かった神殿が設けられることとなった。このことについて、嘉納師範は機関誌に次のように発表している。

> 講道館は、本年の初めより、道場内に神殿を設けることにした。講道館は、館員に敬神の心を養うことの必要なることは初めから認めては居たが、道場内に神殿を設けては居なかった。その訳は、真近（まぢか）に神殿が設けてあると、却って、粗末な取扱いをしたり、不敬にわたるようなことがあってはならぬ、寧ろ神々は遙拝しようという方針であった。然るに近頃、水道橋の新築が落成し、師範席の二階に高貴の方々の御出を願う為の室も出来、神殿を設けても差支えないようになった。そこで、その神殿は文武の教を兼ねるという講道館の根本精神に基き、天照皇大神宮を祀ることにし、先般、館長自ら伊勢の皇大神宮に参拝して、お札を受けて来たのである。[199]

また、世界柔道連盟設立に向けて、様々な新しい試みにも取り組んでいる。乱取の仕方を研究する乱取特別練習科、棒術を研究する棒術部、レスリング部、ボクシング部、科学研究会などや、剣術各流派についても研究を始めるつもりであったという。それらを以て、講道館を様々な武術の殿堂にして研究機関としようとしていたのであった。

しかし、世界柔道連盟設立を半途にして、嘉納師範は帰らぬ人となる。昭和13（1938）年５月、師範の葬儀が講道館大道場において挙行されている。師範死後、講道館は師範の甥である南郷次郎館長に引き継がれていくのであった。

講道館の建物も太平洋戦争末期の空襲による罹災を免れなかった。昭和20（1945）年３月10日、10万近い市民が命を落とした東京大空襲においては無事であったが、その後13日夜間の空襲において、館の半分が焼け落ちる惨事となった。この様子は以下の記述に詳しい。

> 初めに焼夷弾は、師範席の南側に落ちた。其の火焔はすさまじい勢で、上の神殿へ燃え広がった。時は昭和二〇年三月十三日午後十一時三十分であった。爆弾の襲撃が続いたが、之は館を外れて、南電車通りの道路を打壊した。間もなく、雨と降り注ぐ焼夷弾が、大道場の屋根を貫き床に落ちた。其の数は七十以上もあった。窓からも、床からも火を噴いて、紅蓮の焔が一息に全館を嘗め尽さんずる勢、恐ろしいとも何とも形容し難いものであった。
>
> （略）館の四囲は、民家といわず、学校、会社といわず、すべて劫火に焼き払われ、余炎は、西、無尽会社側から、本館の高段者休憩室、高等柔道教員養成所の教室、事務室に侵入して猛威を逞くし、北、三省堂側からも本館北側窓に燃え移り、此の火は道場内のと合流して、一時は、あわや本館もすべて灰燼に帰すべきかと観念された。かかる間に、館の宿直員上坂夫妻は、在館者を督励し、館用「ホース」を延びるだけ延ばして注水し、「バケツ」類は館内にある限りのものを取り出し、隣組の人々の応援をも得て、懸命に消火に尽力し、それが奇跡的にも効果を収められて火勢漸く衰うるに至った。（略）館全体が、四囲の余燼尚治まらず黒煙天に冲して居るうちに屹然として立ち、水道橋畔昔日の偉容を存することの出来た（略）。南郷館長は、英断を以て、即日直ちに、隣組員の数家族を地下室に収容された。また、本郷三、四丁目の町会員の請を容れて、其の罹災民数百名を、数日に亘り、大道場跡に避難せしめられた。稽古人の修行は、一日も之を空（むな）しうせしめてはならぬとの趣意で、三階の研究道場に合せて隣室を打通して、新道場の設備を急ぎ、三月一六日から、ここで稽古ができることとなった[200]。

宿直にいた上坂義仲夫妻を筆頭に、水道橋方向が燃えるのを見て駆けつけた本田存、高木喜代市、高等師範学校柔道部学生らで火を消し止めたという。彼らの懸命の消火活動によって、１階宿直室、

庶務室、２階館長室、女子道場、３階審議室、研究道場を罹災から護ることができた。この空襲によって水道橋一体は焼け野原となり、しかしそこに講道館だけが聳えていたことが、空襲後の市民の気持ちを励ましたという[201]。講道館は約半分が焼け落ちたにも関わらず、３日後には仮道場で稽古を再開している。その後、窓はベニヤでふさいだだけの道場ではあったが、八月の終戦まで稽古は休むことなく続けられた。

◆戦後の講道館

終戦を迎え、学校柔道の禁止や大日本武徳会解散など、柔道は大きな痛手を被った。罹災した講道館は、資金・資材不足のため復旧工事が滞ったものの、昼夜突貫の工事を行い21（1946）年の寒稽古は、キャンパス地の畳ではあったが通常通り30日間に亘って行うことが出来るまでになっていた。ただ財政難を免れることは出来ず、館規模の縮小が図られることになる。館長室はじめ１、２階のすべての部屋を日本出版協会に貸し出し、館機能は道場の中に衝立で仕切りをつけて設けられることとなったのであった[202]。館長室や庶務、編輯室すべて道場の畳の上にあったため、スプリングの影響で絶えず揺れているなかで館務を執っていたという[203]。

当時、醍醐敏郎十段は講道館研修員として、大澤慶己十段と共に講道館に勤務し、２年程講道館の地下室で起居していた[204]。地下の更衣室のロッカーを横に倒し、その上で寝ていたという。また３階の屋上に上がると、隣の後楽園球場の野球が良く見えたそうで、よく寝そべって観戦したと当時を振り返られている。醍醐十段のお話によると、毎週土曜日には進駐軍のパーティーがあちこちであり、そこでデモンストレーションとして柔道を披露していたそうである。佐藤金之助を通訳に、トラックの荷台に畳を30枚ほど載せて、その上に座って毎週出かけて行き、大変好評を博したという。柔道不遇の時代、何とか柔道を復興しようと様々な試みが行われていたようである。

その後、講道館入門者数は昭和20年21万人余りだったものが27（1952）年頃から爆発的に増え始め、講道館が現在地春日町交差点に移転する33（1958）年には２倍以上の46万人を超す勢いとなっていった。

水道橋講道館建物は、講道館が春日町に移転した後、後楽園ジムナジウムとして使用され、ボクシング興行が行われている。後楽園ホールの前身である。現在の、水道橋駅目の前の白山通りと外堀通り交差点に建つミーツポートの場所である。ミーツポートの外壁には、かつてこの場所に講道館があったことを示すプレートが埋められ、当時を知る人々の懐かしむよすがとなっている。

水道橋道場

所在地：小石川区春日町１丁目
現在地：文京区後楽１丁目
JR水道橋駅、地下鉄水道橋駅より徒歩１分
道場の広さ：514畳＋女子道場20畳、研究道場
期間：昭和９年～昭和33年
昭和33年までの累計入門者：約46万人



昭和31年講道館

春日講道館

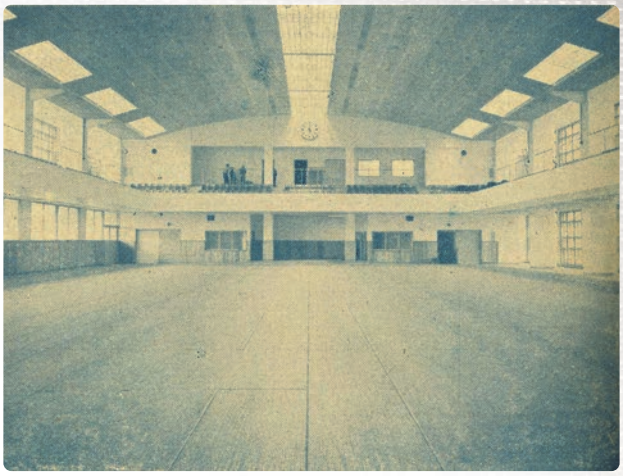
◆創立70周年を迎えて

昭和27（1952）年、講道館は創立70周年を迎えた。記念の年に際し、第３代講道館長の嘉納履正氏は、父・嘉納師範と講道館について次のように述べている。

> 許されるなら、私の見た父の一番尊ぶべき点は「世のため人のために尽したい」という純乎（じゅんこ）たる志であったと云いたい。父は柔道の普及と共にその一生を師範教育、又、国民体育の向上に捧げたが、その成否については世の批判に俟（ま）つべきであろう。しかしながら常住坐臥、思いは世の為に尽したいというのが一生の志であって、これに加うるに不退転の積極精神こそ、父の背骨であったと私は信ずる。講道館の経営にしても社会の為の講道館という自覚に立っていた。趣味の一つとして風景のよい土地をあちこちに買い求めたが、経済的に余裕が出来てそれらの土地を教育関係者あるいは柔道関係者の為に利用したいというのが楽しい未来の夢であって、それらの土地を一家の為に残すという様な気持ちはみぢんもなかった。ある夜、床についた後「自分が死ぬ瞬間、自分の一生を省みて、自分の世の中にかけた迷惑と世の中の為につくした事を比較してみて、世の為につくした量が多かったという自覚を持ちたい」と語った事があるが、この述懐は妙に私の記憶に残っている。私は父が合理主義者であったと共に他面、己を忘れ家を忘れ、ただ世を思うという古い国士の風格のあった事を痛感するものである。

今後、世界の柔道の中心として講道館が発展して行くためには、世界柔道界の為に尽すという謙虚にして高邁な精神こそ必要であって、仮にも日本が柔道の本山であるという様な安易な考えに安んずべきでなく、七十年を期として創立者の理想、柔道による人間完成と、ひいては柔道による世界人類の共存共栄という高い理想を追求してゆく事こそ、私たち柔道人の今後の責務と考えるのである。[205]

嘉納師範の世の為に尽くしたいという思い、そしてそれを具現した柔道の理想を追求していくべきだ、と履正館長は述べており、これは現代の柔道人にも通じる責務であろう。この年、先に欧州で立ち上っていた国際柔道連盟に要請を受ける形で日本も加盟し、嘉納履正館長が国際柔道連盟会長に就任している[206]。また、国際柔道連盟本部も水道橋講道館の中に設置された。



大道場（昭和33年）

◆国際柔道会館建設を企図

入門者数はこの頃から急激に増え始め、40万人に迫るほどになっていた。海外からの柔道修行者も急増し、また各国から講道館に柔道講師派遣の依頼も多く寄せられるようになってきた。27年の１年間だけで、入門者17688人、昇段者16048人に及ぶほどの増加である。現在の500畳あまりの道場は、連日立錐の余地もないほど修行者で賑わう様相で、世界からの講道館に求めるものに対応しきれなくなってきたため、70周年の記念事業として新たな施設の建設案が持ち上がってきた。指導者の養成機関、宿泊施設、柔道家らの交流歓談スペースなどを兼ね備えた国際柔道会館を造ろうというものである[207]。そこで、講道館七十周年記念事業期成会が組織され、日本テレビ社長だった正力松太郎七段を理事長に据えて資金の募集などが行われた。国際柔道会館の建設地候補には、水道橋講道館からも近い文京区春日町２丁目54番地の国有地、南方開発金庫跡が選ばれている。この国有地払い下げ申請にあたっての申請理由書が残されている。貴重な資料なのでここに掲げよう。

第一．緒論

講道館柔道は、今や、世界に発展し、国際親



大道場での寒稽古

善の具ともなれるのであって、更にこれを育成して益々発達せしむる事は応に国家的の仕事たるべしと謂えるであろう。

昨年欧州に於て国際柔道連盟が結成せられたが、これに参加せる国は十八ケ国、而してその会長には講道館長が推挙せられた。又その本部は講道館にこれを置くことになった。講道館は今や、全世界柔道界の晴れの殿堂であり、メッカである。講道館を慕うて遠く海を渡りて此所に来り柔道を修行する者は男女を問わず、踵を接するの状況である。願わくは、この講道館をして我国と海外諸国との間に御互の理解と、友情とを深める国際親善の一大舞台たらしめたい。

第二．事業計画

翻って、講道館の現状を観れば如何、その構造に於て、将た、又その設備に於て、果して晴れの殿堂たるに愧づることなきか。これを憶えば我等は厚顔に忸怩あるを覚ゆ。ここに於て、講道館はその傍に別に国際柔道会館なるものを建設し、指導員の養成や、柔道の技術および原理の研究を行い、又外人に対しては特別の指導を講じ、その他、宿泊施設や、倶楽部等を設けて以て、内外柔道人の集会和親の場所たらしめたい事を計画している。蓋し現在講道館の集り来る柔道修行者の数は日々千数百人に及び、五百畳の道場を以てしても到底、秩序ある指導訓練を為す能わざるによる。而してその会館の建設地としては春日町の南方開発金庫跡が講道館に近くもあり、真に絶好の土地なることを確信する。[208]

理由書に書かれている南方開発金庫は、現在の春日講道館と丸ノ内線線路を挟んだ反対側、複合商業施設「ラクーア」が建っている場所にかつてあった。この1000坪を2600万円で払い下げられることになった。そして、その後この土地を、正力理事長の尽力によって後楽園スタジアムKK所有の隣接地春日町２丁目20番地と交換し、ここに国際柔道会館を新たに建設することとなったのであった。この地が現在の春日町講道館である。

この建設計画と並行して、３年後の昭和31（1956）年に日本での開催が決定した第１回世界柔道選手権大会に向けて、雨漏りのひどかった現・水道橋講道館の改修工事も行われている。しかし、国際柔道会館のための募金は予想を下回って捗らず、当初の予定額を大幅に下回ることとなった。そこで、計画を大幅に縮小し、計画よりだいぶ小規模の柔道会館を建設して、将来資金が確保できた段階で会館を拡張するとのことで、この記念事業募金活動は終結する見込みとなった。だが、正力理事長は、この残金で小規模な会館を建て将来拡張するというのでは不経済で現実的ではない、この際思い切って計画を根本から見直して、現在の水道橋講道館の土地建物を売却し、更に新たな募金活動を起こして世界の柔道の本山にふさわしい大殿堂を建設すべきであると主張した[209]。この時点で寄付は6000万円ほどしか集まらなかったが、それを大幅に上回る３億4000万円を目標額に募金を行うという。当然、不可能であると反対意見が多かったが、不退転の正力理事長は「足



昭和33年文京区春日に移った講道館。
①講道館本館　②道場　③地下鉄後楽園駅
④小石川後楽園　⑤競輪場　⑥アイス･パレス
⑦野球場　⑧遊園地

りない分は自分が保証する」とまで言い切り、この計画を推した[210]。正力理事長は、講道館本館と国際柔道会館を別々の場所で経営することは管理上からも経済上からも不利益が大きいこと、また本館前の白山通り道路拡張計画により現在の敷地の３分の１が削られる予定であること、本館売却については自分が後楽園スタジアムと内々に交渉して１億5000万円の好条件で買い取りという内諾を得たこと、を理由として挙げ、将来の講道館のために、いかに世界的殿堂を建設する必要があるかを声高に説いた。そして賛否両論はあったものの、さまざまな議論ののち、正力案で新たな総合柔道会館を建設することが決定したのであった。

そして昭和31年８月には改めて講道館新築後援会が設立され、２億7000万円の巨費を投じて、鉄筋コンクリート７階建て延べ床面積2484坪の新講道館が建てられたのであった。正力松太郎氏はこの功績をもって、本館１階ロビーに胸像が飾られている。

◆新築なった春日講道館

昭和33（1958）年３月25日、晴れて講道館新築落成式が挙行された。まだ周囲に高い建物などは無く、７階建て講道館の偉容は水道橋や本郷など遠くからも眺めることができ、また講道館屋上からは富士山や遠く上越の山々までが見渡せたという[211]。

正面玄関の大きなガラスは、城壁や柔道衣を連想させるなまこ壁の模様が使われ、柔道の本山である威儀を感じさせる造りである。１階本館側には国際部（現在の国際部の場所と同じ）、庶務課（現・道場指導部の場所）、会計課（現・経理部の場所）、用度課（同前）が置かれた[212]。そして廊下と階段を挟んだ反対側には、各108畳敷きの少年部道場、一般科道場、特修科道場、そして女子部道場があった。１階の道場は講道館からの希望で、通りかかる人らに稽古姿を見てもらえるように、窓を設けて往来からも見学できるようになっていた。２階は、本館側に振興課（現・総務部の場所）、編輯部（同前）、審議会調査部（同前）、全柔連室（現・編輯部）、都柔連室（現在も同じ）、道場相談役室（現・学柔連）があり、道場側には500畳敷の大道場が設けられた。水道橋講道館時代には



新築の講道館国際柔道センター（昭和59年）

大道場内に柱が立っていたが春日ではそれが除かれ、また外を臨めるバルコニーが設置されたのが大きな特徴であろう。畳は化繊の新製品が敷かれた。３階には館長室（現在も同じ）、貴賓室（同前）、理事評議員室（現・会議室）、会議室（同前）があり、大道場の上は吹き抜けの観覧席であった。席数は３段600席である。４階は国際柔道連盟本部事務局（現・日本視聴覚障害柔道連盟）、学柔連本部（現・参与室）、研究室（現・審議部）、閲覧室（現・倉庫）、５階には50畳ほどの研究道場（現・全柔連）と研修生室などがあった。また６階と７階は国際柔道会館にあたる宿泊室があり、１フロア12室ですべて窓に面した明るい造りで、外国人からも大変評判が良かったという。そして、地階には荷物預かり所、更衣室、シャワー室、売店、食堂が設けられた。道場はあわせて982畳と水道橋時代に比して倍増することとなった。

新しい講道館は、観光地としても名高く、ほぼ毎日、はとバスツアー客が団体で大道場の見学に訪れていた[213]。柔道熱の高まりとも相俟って外国人観光客も多く来館していたという。春日町に移転した33年、総入門者数460000人にまでのぼり、１日の講道館での稽古者数が1600人近くを記録する日もあるほど盛況であったという。

昭和35（1960）年10月、かつて東京教育大敷地内に建てられていた嘉納師範の銅像が、講道館本館正面玄関に新たに鋳造、据えられることとなった。この銅像は、もともと嘉納師範喜寿記念の際に作られた彫塑家 朝倉文夫作のものである。戦争により銅像は供出されたが、型が残されており、

この度、再度鋳造されたのであった。現在も、正面玄関なまこ壁模様のガラスの前に師範像は置かれ、修行者らを見守っている。

◆100周年記念事業

新講道館建設から20年ほどが経過し、海外でも更に柔道は盛んになり、国際柔道連盟加盟国は日本が加盟した当時の18ヵ国から100ヵ国を超えるまでになっていた。講道館では、昭和57（1982）年に創立100周年を迎えるに当たり、その記念事業のひとつとして新たな世界柔道センター（のちに国際柔道センターとする）を建設する案が決定された。試合場が２面しかとれないなど、道場が狭隘になってきたこともある。また白山通りの拡張計画によって、かつて駐車場などとして利用していた本館前の広場300坪が強制買い上げになったため、この点でも不便を強いられていた。建設の理由と目的を嘉納行光第４代講道館長は次のように記している。

> 第一は、図書館資料館の設置である。現在講道館には、嘉納師範が若き頃着用したぼろぼろの稽古着をはじめ、柔道に関する貴重な資料文献等が保管されているが、これ等の完全な保存、展示、閲覧の施設の必要に迫られていた。又百年を経た現在、散逸されている柔道史上重要な資料文献等の新しい蒐集も考えねばならない。当面は、講道館に保存されているものが主体となろうが、竣工時に間に合うよう目下鋭意整理を進めている。
>
> 第二は、諸道場の隆盛と道場部門の全体的総合的運用の実施である。かつて伝統ある講道館の大道場は国内外の柔道施設の中心として、柔道人の憧れの的であり、又それにふさわしい活況を呈してきた。新道場の発足と共に世界柔道の中心としてふさわしい魅力ある往時の姿に戻さなければならない。又従来は、少年部、女子部、学校講道館、練成部といった各セクションが同じ道場部門に属しながら、夫々（それぞれ）相互の密接な関係を欠くきらいがあった。こういった問題を検討するため、昨年春道場検討委員会が設置され、更に小委員会で十数回にわたって種々検討が重ねられて来た。（略）
>
> 第三は、全国各地の柔道人にこの新しい施設を積極的に活用して頂くことである。従来講道館は全国各地の柔道人との交流に必ずしも積極的ではなかった。従って意思の疎通を欠く面もあったであろう。今後我々は形の指導や講習会等地方の要請に応じて必要とあらば出向く体勢を整えることも検討している。地方各地からも、講道館恒例の寒稽古、暑中稽古、講習会、合宿等の機会を利用して、できる限り多くの柔道人に参加して頂きたいと願っている。このため、三階に設置された宿泊施設は多目的利用を考え、運営の中心を百人収容できる合宿に置いている。又地下の一部に設けられる食堂も、適当な専門業者に任せることになろう。又従来から講道館の道場は各種の柔道大会の会場として各方面から巾（はば）広く利用されて来たが、五階から七階にかけて設けられる新道場は、全体で以前の一倍半の広さとなるため、一層有意義に活用されるであろう。（略）
>
> 真に講道館を思い、柔道を愛する柔道人を中心とした浄財によって建設されて行くことを思うと、この建物が建物としてだけのステイタスシンボルであってはならないとの感を深くした。（略）講道館も講道館柔道も、創始者嘉納師範の理想理念を逸脱してはならない。百年の歴史の中には色々な困難があったであろうが、その時々の権力、外圧に屈しなかったのが、講道館の伝統であり誇りであった。（略）柔道界がいかに意見を異にしても真に柔道を思う人達の結集となった時、新たな次の百年へ向かっての正しい柔道発展の展望が開かれるのではなかろうか。[214]

柔道人らの貴重な醵金によって建てられる新施設を、今までに無かった嘉納師範や柔道に関わる貴重な資料を展示保存する資料館の設置、また道場機能の拡張運用、そして宿泊施設等を拡充して全世界柔道人の要望に応え得るものにしよう、との意気込みが感じられる。この頃には毎月２回、大道場で全日本選手権出場者による得意技の解説講座が開かれたりと、色々な取り組みが始まっている。また、これに加え、嘉納師範の時代から続けられてきた柔道の科学研究の面にも更に力を入れ

るため、館内に研究施設を設けることも決定された[215]。これが現在の講道館柔道科学研究会である。

この国際柔道センター建設地には、嘉納師範ゆかりの地、文京区にある茗荷谷の国有地が選ばれた[216]。ここは、かつて嘉納師範が校長を勤めた高等師範学校、後の東京教育大学、筑波大学の跡地である。センター建設に向けての講道館創立百周年記念行事実行委員会は永野重雄氏（日本商工会議所会頭）を会長に、石井光次郎氏（元衆院議長・日体協会長）を名誉会長に仰ぎ、文部省、また地元の文京区との協議に入った[217]。しかし、文京区は国有地の全面払い下げと区立体育館建設を希望し、結局折り合いがつかず、この案は中止となるのであった。そして、幾度かの計画練り直しを経て、現道場を取り壊して国際柔道センターを建てるという案へ向かって行くこととなる。

◆講道館国際柔道センター

昭和57（1982）年11月、道場を中枢とする3500坪の国際柔道センターの地鎮祭が執り行われ、1年半後の59（1984）年３月竣工となった[218]。３月31日が記念の稽古始めであった。

１階は売店と立体駐車場、２階には柔道資料館、科学研究会の各研究室が置かれた。またこの時初めて講道館殿堂が作られ、講道館柔道の発展に貢献した草創期の柔道家や十段の先生方19名が顕彰されることとなった。３階は宿泊階で、20名ずつ使用できる大部屋が４部屋設置され、同時に124名までの宿泊が可能となっている。また、内外柔道人らの憩いの場となるように、広いロビーも備え付けられた。４階には道場受付、ロッカールーム、浴場などがある。５階から７階は道場階で、５階には240畳の女子部道場、114畳の少年部道場、66畳の撮影用特別道場が造られた。また６階は240畳の学校道場と192畳の国際部道場、７階は420畳敷の大道場が設置された。大道場は、旧道場より横幅を広く設計したため、試合場を４面取ることが可能となった。そして８階には大道場を見下ろすように４面見学席が460席設けられた。また１階は住友銀行がテナントとして入ることとなった。柔道センター壁面上部には、車上や遠くからでもよく分かるように、嘉納師範筆の講道館の文字また講道館マークが大きく入れられた。道場の総面積はあわせて1272畳余り、講道館の歴史の中でも最大規模を誇る、柔道の総本山に相応しい建物と言えるであろう。

◆おわりに

嘉納治五郎師範は、誰もが不可能な夢と思えるような事をも、精力善用自他共栄を体現しながら実現させてきた人である。「悲観はするな、精力善用自他共栄の精神でものごとに臨めば、必ず進む道が見つかる。柔道家に悲観なし」と言い続け、身をもってそれを体現してきた人である。東京オリンピックの招致などはその顕著な例であろう。ただ、師範は夢を夢として終わらせない実行力を備え養っていた。明治15（1882）年、嘉納師範が永昌寺の１室で「柔道」を富田常次郎らを相手に教え始めた時、巷間に笑う者こそあれ、誰が講道館柔道が現在のような世界的なものになると考えていただろうか。

師範の懐（いだ）いていた夢には、次のようなものもある。ある日師範が編輯部に来て話した内容である。

> 講道館は従来移転するたびに道場の畳数が倍になった。今の道場は五百畳余りで、下富坂の二百七畳に較べると大きくなったようだが、予（かね）て俺の考えておる世界柔道連盟が結成され、講道館がその中心となるようになれば、内外における柔道修行者の数も益々多くなり、殊に海外から来る修行者も増加するに相違ない。そうなると広いと思われる今の道場も狭くなり、増築の必要に迫られよう。もしそうなれば、この次に造る道場は、従来の仕来（しきた）りからいって千畳敷というところだろう。俺はいつまで生きられるか知らないが、この千畳敷だけは俺の生きておる間に造りたいものだ。その次は二千畳、その又次は五千畳となるが、その頃は俺は多分飛行機に乗って講道館を空から眺め、林や田中（まだ二十代の共に若い編集部員）の活動しておるのを見て、「おお、皆よく働いておるネ」と喜んでおるだろう[219]

講道館は、70周年を機に980畳、そして100周年を迎えて師範が語る千畳敷を超え1200畳余りの道場を擁する施設へと発展を続けて来た。この発展は、それぞれの時代の柔道家たちの実行力と、ま

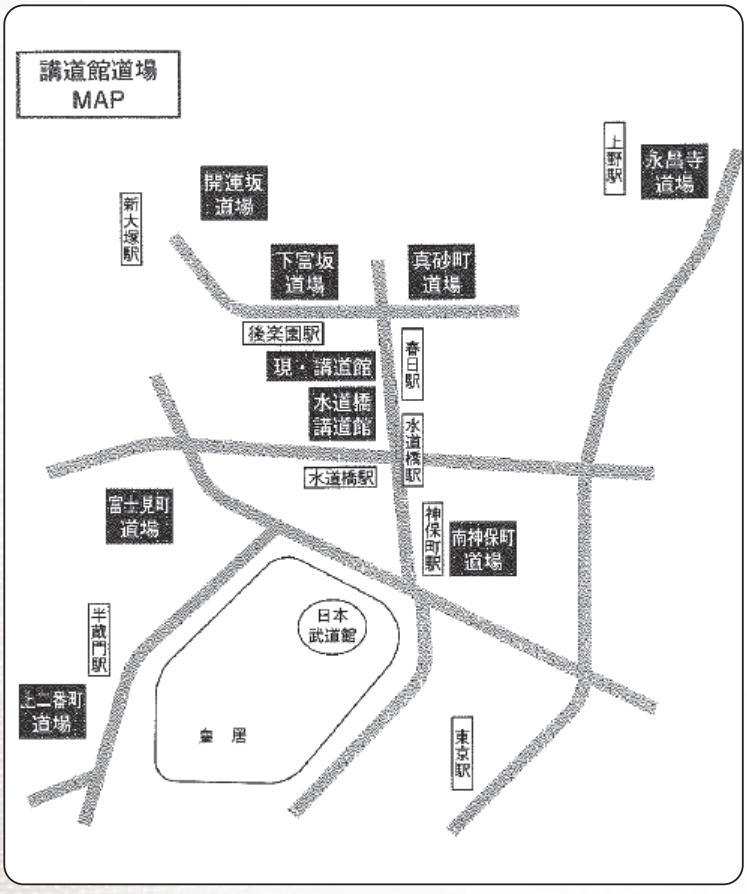
た講道館が、精華を見失わず柔道研究・普及の充実をしっかりと行ってきた証左であると言えるのではないだろうか。講道館は今年で144年を数える。今後も発展を続けるために、嘉納履正第３代館長の述べたような、世界柔道界の為に尽くすという謙虚にして高邁な精神を持ち、精力善用自他共栄の理想を追求してゆくことが大則であるのではないだろうか。（おわり）

春日講道館

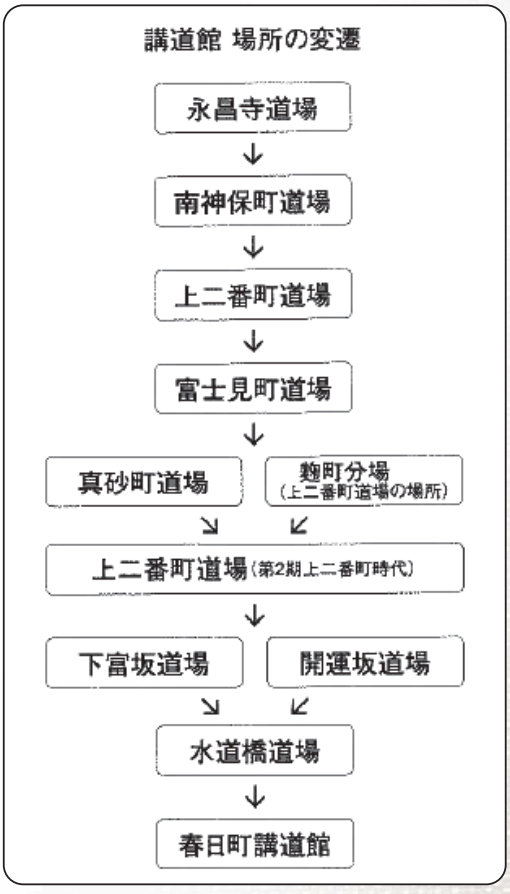
所在地：文京区春日1-16-30
　　地下鉄後楽園駅から徒歩3分、
　　春日駅から徒歩1分
道場の広さ：982畳→1272畳
期間：昭和33年～現在
現在までの累計入門者：約220万人



師範銅像と、師範筆「講道館」扁額



講道館道場マップ



場所の変遷

※引用文献は現代仮名遣い・当用漢字に改め、必要に応じて平仮名表記とした。

主要参考文献：『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』
大滝忠夫編、新人物往来社（昭和47年）

1 現在の台東区上野
2 平成19年に図書資料部が行った永昌寺御住職への聞き取り調査による
3 「怒涛の柔史八十年」古賀残星著『柔道』第34巻第１号（昭和38年１月）
4 正確には12畳半
5 誓文帳は明治17年に作られ、溯って署名が成された
6 講道館蔵
7 講道館四天王の１人。後の七段
8 西郷四郎六段。講道館四天王の１人。永昌寺境内の蓮池に潜ったエピソードも残っている。
9 小介とも。幕末の長州藩士。騎兵隊の軍艦として活躍した。
10 附属室の１つ２畳半に起居していたという。
11 「永昌寺を訪ふ」林静夫著『柔道』第13巻第１号（昭和17年１月）
12 「講道館創立時代を語る 其の１」富田常次郎著『柔道』第３巻第８号（昭和７年８月）
13 「嘉納塾沿革概略」富田常次郎著『嘉納塾同窓会雑誌』第１号（明治26年８月）
14 前掲註２参照
15 講道館に通うことを親が許さなかったため、内緒で永昌寺に通っていたという
16 「講道館創立時代を語る 其の２」富田常次郎著『柔道』第３巻第10号（昭和７年10月）
17 「柔道修行思出話」樋口誠康著『柔道』第15巻第３号（昭和19年３月）樋口は無償で教わるのを心苦しく思い、有馬純文と２人で月謝を払いたいと言ったが、師範は受取ることはしなかった。そこで、師範は甘いもの好きなのでお菓子なら受取ってくれるだろうとお菓子を渡したところ、喜んで受け取ってくれたということである。
18 ヘンリー・シジウィック（1838～1900）。イギリスの哲学者、倫理学者
19 前掲註16参照
20 前掲註17参照
21 床下に並べる部材
22 『嘉納先生傳』横山健堂著、講道館（昭和16年４月）
23 後の白藤丈太郎
24 根太を直接地面に並べること
25 「嘉納先生を偲ぶ座談会」『柔道』第10巻第５号（昭和14年５月）
26 前掲註11参照。出入りは庫裏の方からしていた
27 前掲註11参照
28 現在の千代田区神田神保町
29 「柔道発達の側面観」富田常次郎著『柔道』第２巻第２号（大正12年２月）
30 嘉納履正氏の筆による。昭和43年、講道館が中心となって記念碑を建てた。
31 「講道館柔道発祥之地記念碑除幕式」講道館（昭和43年10月）
32 「修行時代追懐談」富田常次郎著『柔道』第７巻第２号（昭和11年２月）
33 前掲註32参照
34 『東京教育史資料大系』東京都立教育研究所調査普及部教育調査室編、東京都立教育研究所、昭和62年
35 予科は４年制
36 現在の千代田区九段南
37 現在の千代田区神田神保町２丁目
38 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』大滝忠夫編、新人物往来社、昭和47年
39 「講道館創立時代を語る（その４）」
40 麒麟麦酒社長
41 イギリス文学者、ジャーナリスト
42 柔道殿堂の１人。指南役も務めた。七段
43 現在の千代田区神田神保町３丁目
44 現在の千代田区三崎町
45 「遠足会盟約書」明治12年10月、講道館蔵
46 後の十段。山下も明治12年当時、近所の富士見町におり、遠足会会員の１人でもある。
47 「柔道の七十年(8)」丸山三造著『柔道』第21巻第４号、昭和25年
48 「講道館入門誓文帳　第一」講道館蔵
49 第３代住友総理事
50 外交官。シャム、スペインの全権公使を勤める
51 内務官僚、のちに貴族院議員となる
52 動物学者
53 現在の文京区本郷１丁目付近
54 「上二番町の憶ひ出」石川千代松著『柔道』第５巻第12号、昭和９年
55 拙著「講道館歴代道場めぐり(1)」『柔道』第85巻第３号、平成26年
56 「柔道の七十年(12)」丸山三造著『柔道』第21巻、昭和25年
57 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』大滝忠夫編、新人物往来社、昭和47年
58 現在の千代田区一番町
59 裏神保小路は現在の靖国通り、表神保小路は靖国通りに並行する南側の通り。江戸城に近い通りが「表」となる。
60 東京大学の赤門に並び称せられて黒門と言われた。嘉納師範の家が今川小路から上二番町へ移った後の明治18年、専修大学がこの地へ移転してきた。

【南神保町地図典拠】
DVD-ROM「江戸明治東京重ね地図」
エーピーピーカンパニー発行

61 現在の千代田区一番町
62 「私の嘉納塾生活」加藤泰通著『柔道』第33巻第２号（昭和37年）
63 「講道館入門誓文帳　第一」講道館蔵
64 後述するがこの神代氏宅と講道館の関係は、明治26年に下富坂道場ができるまで続く。
65 「講道館発展史（九）」黒頭巾著『柔道』第２巻第５号（大正５年）
66 「柔道の七十年(8)」丸山三造著『柔道』第21巻第５号（昭和25年）
67 前掲註65参照
68 「講道館沿革史」『柔道』第23巻第12号（昭和27年）
69 前掲註65参照
70 当時の鏡餅は直径３寸５分（約10cm）一重（ひとかさね）であったが、後に「講道館柔道修行者心得」第11項に５寸（役15cm）と定められた
71 この習わしは昭和初期まで続けられた。
72 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』大滝忠夫編、新人物往来社、昭和47年
73 明治27年５月20日、講道館下富坂道場新築落成式において、嘉納師範と小田勝太郎は形を披露した。この形を見た勝海舟はその感慨を書に認め、書は額装されて今も講道館に伝わる。
74 「私が柔道をはじめた頃の世相」南郷次郎著『柔道』第17巻第２号（昭和21年）
75 旧幕時代の鷹匠の娘で、彼女の墓は永昌寺にあるという。(「講道館発展史（三）」黒頭巾著『柔道』第３号、大正４年)
76 イーストレーキ兄弟は、弟のみ入門している。
77 明治18年～19年
78 講道館柔道資料館で常設展示されている。
79 「修行時代追懐談」宗像逸郎著『柔道』第７巻第３号（昭和11年）
80 現在の千代田区九段南
81 この富士見町道場については富士見町道場の項で詳述する。
82 現在の文京区本郷４丁目
83 当時は大倉増次郎
84 『嘉納師範日記（英文邦訳)』明治22年－明治23年。富田常次郎、山下義韶、宗像逸郎等の幹部は当時柔道教授のため東京を離れており、講道館本館に居なかった。
85 「講道館創立時代を語る（其の六)」富田常次郎著『柔道』第４巻第７号（昭和８年）
86 「講道館創立時代を語る（其の七)」富田常次郎著『柔道』第４巻第８号（昭和８年)。本田増次郎は、反省し嘉納塾退塾願を嘉納師範に提出している。
87 真砂町道場を貸していた陸軍省の都合による
88 前掲註85
89 当時通っていた海軍軍人養成のための学校「格致校」が上二番町道場の隣にあった縁で入門した。
90 柔道を稽古したいと思っていたところ柔道衣を抱えた一団を平河天満宮で見かけたので、その後をついて行って上二番町道場へたどり着いたという。
91 鉄心を真綿で包み「外柔内剛」を表したもの。現在の講道館マークは、同じ鉄心を真綿で包んだものの横断面を図案化した。
92 『柔道の七十年』丸山三造著（醍醐敏郎氏資料）
93 昭和13年から数年間、この地に住んでいた。
94 この付近は「番町の番町知らず」と言われ、屋敷と坂道が多いため迷う者が多かったという。永岡秀一十段も入門手続きの帰りに道に迷い、雪の夜に番町をさまよったという記事が残っている。
95 「講道館歴代道場めぐり(2)」拙著『柔道』第85巻第４号（平成26年）
96 1864～1929。明治大正期の財政家・実業家。日本大学の設立者の１人
97 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』大滝忠夫編、新人物往来社（昭和47年）
98 現在の千代田区九段南
99 もともと天神真楊流を学んでおり、明治19年４月15日に22歳で講道館に正式入門している。ただし嘉納塾としては最初仮入塾の立場であった。
100 およそ36メートル
101 「昔時の指導振りと修行者の意気」本田存著『柔道』第５巻第５号（昭和９年）
102 1843～1902。帝国海軍軍人、西郷隆盛の弟。
103 「柔道文学（十二)」横山健堂著『柔道』第６巻第３号
104 横山作次郎
105 「室内掃除担当表・庭園掃除担当表」講道館蔵
106 「講道館昔咄明治十九年の頃」小田勝太郎著『柔道』第３巻第９号（大正６年）
107 「柔道文学（四〇)」横山健堂著『柔道』第10巻第１号（昭和14年）
108 前掲註106参照
109 「富士見町時代の憶い出」嘉納徳三郎著『柔道』第５巻第12号（昭和９年）
110 「わが修行時代を語る（一)」磯貝一著『柔道』第12巻第１号（昭和16年）
111 前掲註97参照
112 「柔道発達の側面観」富田常次郎著『柔道』第２巻第７号（大正12年)。この前年、同じ良移心当流の者を西郷四郎が投げ飛ばしたことがあり、その敵討の様相であったという。

113　前掲註112によると、３本目は中村氏に抑えつけられたものの、下から逆十字に絞めたところを審判の八谷氏に止められ試合を終ったとのこと。
114　下冷泉家第18代当主
115　第25代・28代内閣総理大臣
116　1860～1930。帝国海軍大将
117　「講道館物語」石黒敬七著『柔道』第11巻第９号（昭和15年）
118　現在の千代田区九段南
119　「嘉納師範差出大山巖宛願書（明治21年６月15日）」「嘉納師範差出大山巖宛願書（明治21年７月３日）」いずれも講道館蔵
120　現在の文京区本郷４丁目
121　「講道館今昔を語る」本田存著『柔道』第10巻第４号（昭和14年）
122　現在の千代田区一番町
123　『嘉納治五郎』嘉納先生伝記編纂会編、講道館発行（昭和39年）
124　「柔道一班幷ニ其教育上ノ価値」嘉納師範述（明治22年）
125　「嘉納師範柔道講義覚書」講道館蔵。
126　『小説 師弟　嘉納とその門人たち』戸川幸夫著
127　「柔道発達の側面観」富田常次郎著『作興』第３巻第３号（大正13年）
128　明治20年２月12日入門。森大臣を警護していた護衛官にその場で切り殺されている。
129　「柔道文学（四〇）」横山健堂著『柔道』第10巻第１号（昭和14年）
130　当時は大倉増次郎
131　『嘉納師範日記（英文邦訳）』明治二二―明治二三年
132　東京で最大の宴会場であった「井生村（いぶむら）」で500人以上が集まり師範送別会が行われている。
133　前掲註131参照
134　「講道館創立時代を語る 其の六」富田常次郎著『柔道』第４巻第７号（昭和８年）
135　前掲註126参照
136　西郷の晩年、師範は西郷を含めた講道館草創期の古参を集めて同窓会を開催した。西郷の養子・孝之は、西郷から聞いた話として「嘉納師範はいろいろと御馳走を用意して供応され、「四郎、これはどうだ、おいしいぞ。それは嫌いか」などと箸を取ってやらんばかりに親切にもてなしてくれた」（前掲註126参照）と伝えており、師範がどれ程西郷を可愛がっていたかが伝わってくるようである。
137　『柔道百年の歴史』講道館編、講談社発行（昭和45年）
138　陸軍省の都合による
139　後の第一高等学校
140　現在の文京区本郷
141　『天皇と東大』立花隆著、文芸春秋発行（平成17年）
142　現在の文京区小石川
143　「雑報」『嘉納塾同窓会雑誌』第１号（明治26年）
144　現在の千代田区一番町
145　現在の文京区小石川
146　「四拾八尺」と図面にある
147　「私の嘉納塾生活」加藤泰通著『柔道』第33巻第２号（昭和37年）
148　「講道館新築落成に関する記事」圓山子稿『嘉納塾同窓会雑誌』第４号（明治27年）
149　下富坂道場新築を機に、入門金１円のみ納めることとなったが、月謝等は一切徴収していなかった。畳替えや建物の修繕で、盆暮れには毎回大きな赤字が出ていたという。
150　佐村嘉一郎十段の父にあたる
151　前掲註148参照
152　「講道館改正規則」『嘉納塾同窓会雑誌』第４号（明治27年）
153　「造士会創立の趣旨」『国士』第１号（明治31年）
154　規則などはその翌年33年に整備されている
155　「講道館の思ひ出」杉浦和介著『柔道』第13巻第10号（昭和17年）
156　「雑報」『武徳誌』第２編第４号（明治40年４月）
157　現在の文京区大塚
158　「閑雲去来」海南生（下村宏）著『有効の活動』第８巻第３号（大正11年）
159　「今昔講道館物語」竹下彦一著『柔道』第49巻第６号（昭和53年）
160　「寒稽古と鏡開き」田中勇著『柔道第21巻第２号』（昭和25年）
161　「変ることなき燈火」苫米地英俊著『柔道』第34巻第２号（昭和38年）
162　「師範訓示」『講道館柔道教師会会報』第２号（明治42年）
163　横山は下富坂道場指南役、山下は開運坂道場指南役
164　「講道館記事」『講道館柔道教師会会報』第１号（明治41年）
165　嘉納治五郎「師範訓示」『講道館柔道教師会会報』第１号（明治41年）
166　嘉納治五郎「師範訓示」『講道館柔道教師会会報』第２号（明治42年）
167　「講道館記事」『講道館柔道教師会会報』第２号（明治42年）
168　現在の文京区大塚
169　説経節とは、中世に始まり、近世にかけて盛んに行われた語り物文芸。若松若太夫はその初代名跡。息子の後の二代若太夫と共に師範邸のちに下富坂道場裏に起居した。
170　『嘉納先生伝』横山健堂著、講道館発行（昭和16年）

171　昭和55年
172　『角川地名大辞典』、また『東京の坂風情』道家剛三郎著、東京図書出版（平成13年）など
173　「開運茶菓 Mの話」流壷居著『作興』第８巻第３号（昭和４年）
174　「柔道の巻」『ぬれ胡蝶』第３冊（『嘉納先生伝』）
175　「講道館記事」『講道館柔道教師会会報』第２号（明治42年）
176　1875～1957。第二次世界大戦時の内閣情報局総裁であり、ポツダム宣言受諾に尽力し、玉音放送にも携わった。号は海南。
177　「閑雲去来」海南生『有効の活動』第８巻第３号（大正11年）
178　前掲註175参照
179　「講道館女子部入門規程」資料編
180　「嘉納師範英文日記邦訳 大正十年」講道館蔵
181　「修行九年思出を語る」芥川綾子著『柔道』第８巻第９号（昭和12年）
182　1849～1923.衆議院議長も務めた政治家
183　「大塚坂下町会創立趣意」『大塚坂下町会便覧』（昭和12年）
184　前掲註183参照
185　「嘉納師範英文日記邦訳 大正十年」講道館蔵
186　「嘉納師範を八柱霊園に送る」『柔道』第９巻第６号（昭和13年）
187　前掲註170参照
188　「嘉納師範英文日記邦訳　大正一三年（前）」講道館蔵
189　嘉納治五郎「大正十一年を迎へて会員諸子に告ぐ」『有効の活動』第８巻第１号（1922年）
190　嘉納治五郎「講道館柔道の文化的精神の発揮」『有効の活動』第８巻第１号（1922年）
191　「講道館後援会彙報」『柔道』第1巻第1号（1930年）
192　嘉納治五郎述「はじめて資を天下に募る（柔道家としての私の生涯）」『作興』第７巻第１号（1928年）
193　「嘉納師範英文日記邦訳　昭和五年」「嘉納師範英文日記邦訳　昭和六年」講道館蔵
194　「講道館創立満五十周年を迎へて」『柔道』第３巻第４号（1932年）
195　「中央有段者会を迎えて」嘉納治五郎『柔道』第２巻第８号（1931年）
196　「講道館記事」『柔道』第４巻第３号（1933年）
197　「講道館新築落成祝賀式の記」『柔道』第５巻第４号（1934年）
198　「講道館創立五十周年記念祭の記」『柔道』第６巻第１号（1935年）
199　『作興』第16巻第３号（1937年）
200　「講道館の罹災と復興の状況」『柔道』第17巻第１号（1946年）
201　山田康「講道館爆撃と講道館精神」『柔道』第49巻第４号（1978年）
202　「新装なれる講道館」田島鐵次郎『柔道』第21巻第６号（1950年）
203　醍醐敏郎十段談
204　女川彌一郎九段と共に地下室で起居していた
205　「講道館創立七十年に際して」嘉納履正著『柔道』第23巻第12号（昭和27年）
206　「昭和27年度事業及会計決算報告」財団法人講道館、講道館蔵。この時、講道館の國委細柔道連盟に対する地位及び責任を明瞭にするため「国際柔道（連盟）が講道館柔道の健全なる発展に寄与し、かつ国際柔連の現行規約が柔道の技術的事項を挙げて講道館の指導に帰している以上、講道館は国際柔連自体に対し又、各連盟員に対し、技術上の事項、例えば国際審判規程、重量制の問題、指導方法の基準等に関し勧告を与え得る」などの事項が申し送られている。
207　『柔道百年』老松信一著、時事通信社（昭和41年）
208　「申請理由書」『昭和二十八年七月 国有地払下関係綴』講道館蔵
209　前掲註207
210　「続・終戦前夜と都柔連発足時の記録」山田康著『柔道』第49巻第12号（昭和53年）
211　「新講道館について」『柔道』第29巻第４号（昭和33年）
212　「完成した新講道館」『柔道』第29巻第４号（昭和33年）
213　前掲註211
214　「講道館国際柔道センター竣工の年を迎えて」嘉納行光著『柔道』第55巻第１号（昭和59年）
215　「講道館国際柔道センター建設工事はじまる」木口博司著『柔道』第53巻第５号（昭和57年）
216　「世界柔道センター（嘉納記念館）建設計画要旨」講道館蔵
217　『講道館百三十年沿革史』講道館著（平成24年）
218　「講道館国際柔道センター修祓式」木口博司著『柔道』第55巻第５号（昭和59年）
219　「嘉納師範と晩年の夢」鵜澤孝著『柔道』第24巻第10号（昭和28年）